錬金術師は今日も行く

心眼の虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
錬金術師は今日も行く

【Ｎコード】
Ｎ２７０６Ｓ

【作者名】
心眼の虎

【あらすじ】
謙斗「どーも、この物語の主人公の≪柳本　謙斗≫です」、コルリ「マスターの補佐をさせていただく≪コルリ・Ａ・ホミュラー≫です」、謙斗「なんか作者に「この物語のあらすじを紹介しろ」と言われたからこうしてここにいるわけだが・・・どうしろと？」、コルリ「本当ににそうですね」、謙斗「てか、お前がここに居ていいのか？」、コルリ「それはどういう意味ですか？」、謙斗「だってお前が出てくるの第八部からだろ。若干ネタバレになってないか？」、コルリ「・・・・・・・・・」、謙斗「・・・・・・・・・」、

コルリ「・・・あらすじの紹介をしましょうか」、謙斗「・・・そうだな」、コルリ「この物語は学園最強のマスターが学校に登校するところから始まります」、謙斗「そこから第八部まで出てくるキャラの紹介みたいな感じだけどな」、コルリ「そして私と出会い、マスターは錬金術師へと覚醒します」、謙斗「出会うというより押し付けられた感じだけどな」、コルリ「錬金術師になったためにマスターは命を狙われてしまいます」、謙斗「最初に狙われていたのはお前じゃなかったか？」、コルリ「そしてマスターは狙ってきた敵の本陣へと押しかけます」謙斗「だいたいあってる」、コルリ「そこでマスターは──」、謙斗「うぉい！！　それ以上は言うなよ！！、ネタバレになっちまうだろ！！」、コルリ「モゴモゴモゴモゴ（すいません、マスター）」、謙斗「もういい、〆は俺に任せろ」、コルリ「・・・すいません」、謙斗「と言うわけで、この俺が活躍する≪錬金術師は今日も行く≫をよろしく！！」、コルリ「皆さん、よろしくです」、謙斗「・・・・・・」、コルリ「・・・・・・」、心眼「ハイ、カットォ！！」、謙斗「これでいいのか？」、心眼「微妙だが・・・まぁ妥協しておいてやろう」、謙斗「いや、そこは妥協しちゃダメだろ」、コルリ「大体こんな軽いノリの話なので皆さん本当によろしくお願いします」、謙斗・心眼「まだカメラ回ってたのかよ！？　ってか最後を持ってかれたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そうだ学校へ行こう

この俺《柳本　謙斗》はただ普通に過ごしている高校生だ。
ただ普通に生活するのもつまんないから唐突ながらも俺はＲＰＧっぽく生活することにした！
この万年中二病の俺に不可能なことなど無いっ！！
ハーッハッハッハッ！！
「さて・・・学校へ行こうか」
俺は一瞬で冷静になり、家を出て学校へ向かった・・・

ＭＡＰ移動（登校）中・・・・

「幼馴染の京子（きょうこ）が現れたっ！！」
お決まりの台詞を言ってみる、うんなんだかＲＰＧっぽい。
「何でＲＰＧで敵とエンカウントした時の台詞を！？」
ニュー○イプの反応速度くらい素早いキレでツッコんでくる、流石俺の幼馴染だ。
「さてどうする？」
「どうもこうも学校に行こうよ・・・」
「まぁ・・・そうだな」
と言うわけで学校へと歩き出す。

再度ＭＡＰ移動（登校）中・・・

「親友の正也（まさや）が現れた！」
「・・・・はぁ」
京子の時と同じくらいの距離で言ったけれども正也は気づいていない。
「元気がないようだ・・・」

何かあったみたいだな・・・
「さてどうするの？」
京子がそういうと俺は考え始める。
いつもの様にあいさつする・軽く膝かっくんをする・背後からドロップキックをかます
ふと選択肢が三つ頭の中に浮かんだが俺は速攻でこれを選んだ。
背後からドロップキックをかます
「うぉりゃぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
ドスッ！！　ズシャァァァァァッ！！
思いっきり助走をつけ豪快に放ったドロップキックは正也の背中にクリーンヒットした。
「よっしゃぁぁぁぁ！」
俺は素早く起き上がり、ガッツポーズをする。
「よっしゃぁぁぁぁ！じゃねぇっ！！」
正也は素早く立ち上がりガッツポーズをしている俺に向かってツッコミを入れる。俺のドロップキックが効いていないだと！？
「じゃあ・・・おっす！」
よっしゃぁぁぁぁ！！じゃないと言われたので普通に挨拶してみる。
「おっす！・・・でもねぇっ！」
「えーと、それじゃあ・・・」
「まずは謝れ！！」
「その発想はなかった・・・」
「無かったのか！？」

「サーセン（笑）」
「今謝っちゃった！？」
このツッコミの正確さはいつもの正也だな。
「早く行かないと遅れちゃうよ？」
京子にそう言われてケータイを見ると８時２１分、予冷が鳴るのは８時３０分。ここから学校までは約１０分。
「じゃあ走って行くぞ」
「マジかよ、よくそんな元気があるなお前は」
「主人公だからなっ！！」
「なんの話だ！！」
「先に行くぞ」
「えぇっ走るの？」
「早くしないと置いてくぞ京子ー」
そう言って俺たちは学校へと駆け出した。

ＭＡＰ移動（登校）中・・・

無事に予冷が鳴る前に学校へと着き、靴を履き替え教室へと向かった。

ガララッ

「うぃーっす」
「よぅ、ヤナギー」
俺の名字は「柳本（やなぎもと）」だから略して「ヤナギー」
「昨日のあれ見たか？」
「見た見た、面白かったな」
「面白かったけど、原作と絵が違うのがなぁ・・」
今俺と話しているこいつは「井藤（いとう）」結構気の合う類友だ。それと俺と井藤は俗に言うオタクってやつだ。

井藤と会話していると、ふと登校中の正也のことを思い出した。
「そういやなんでお前元気なかったんだ？」
「それ私も気になるなー」
「あぁ・・・それはな・・」
ゴクリ・・・シリアスなムードで正也はこう言った。
「ＰＣから音でなくなっちまって」
「なぁんだそんなことだったの？」
京子はそう呆れたが俺は。
「なんだってぇぇぇぇぇぇぇ！！」
思いっきり叫んだ。
「きゃっ！？」
いきなり叫んだため京子は思わず驚いてしまったようだ。
「そりゃへこむわー」
「ただＰＣから音がしなくなっただけだよ！？」
「動画見ても音しないんだぞ！！」
「うっ、確かに・・」
「それに曲もきけないし」
「あうっ」
「ＰＣのギャルゲしてもヒロインたちの声も聞けないんだぞっ！！」
「あぅぅぅぅ」
「音の大切さがわかったか！！」
「分かりました、音がしなくなっただけと言ってしまってすいませんでした・・」
「よろしいっ」
「最後のは一般人には関係ないだろう・・」
「そうだけど京子はＫ〇Ｙ作品の大ファンだからな」
「なるほど・・・・」

ガララッ

「ＨＲはじめるぞー」
担任が入ってきたため俺たちは席に着いた。

第二話につづく

そうだ学校へ行こう（後書き）

はいどうもー心眼ともうします
こんな短い小説をお読みいただいてありがとうございます
これ実は何話かあるんですよねーｗｗ
次の話もお読みいただければ幸いです

錬金術の基礎理論は難しい

ＨＲが終わり一時限目が始まった

一時限目「理科」

今していることは物質とエネルギーらしいが、それなら錬金術ぐらい教えて欲しいものだ。そんな事が出来るのならば、だけどな。とりあえず物質の原子を変換してそれを再構成すればいいのか？

そんな〇門さんぐらいしか出来なさそうなことを考えていると・・・

「何ぼーっとしてるの？」

「え？」

「え？じゃないわよ、聞いてたの？」

俺の錬金術の基礎理論的な頭が良いんだか悪いんだかよく分からない事を考えている途中に話しかけてきたのは理科の教師≪園田（そのだ）弘子（ひろこ）≫、三組の担任で陸上部の顧問で怒ると持ち前の持久力で地の果てまでも追いかけられるという・・・（井藤談）

「何考えていたのよ」

「ただの錬金術の基礎理論を立てていました」

「・・・・え？」

「錬金術を知らないんですか？」

「そういうことじゃなくて・・・・」

「物質を創り変えて他の物質にする術を錬金術って言うんですよ」

「それくらい知っているわよ！」

「あともう少しなんですけど、最後にどうやって原子を変換するかが問題なんですよね」

「馬鹿と何とかは紙一重と言うけどそれは・・」

「やはり魔力とかが必要なのですかね？」

「ゲームと現実をごっちゃにするのはどうかと思うわよ」
「ゲームじゃありません中世の時代に本当にいた錬金術師の真似事です」
そんな風に２０分話していると━

《キーンコーンカーンコーン》

「あぁぁぁ！　また柳本にはめられたぁぁぁ！」
「これぞ俺マジック」
「今日はここまで！明日はの続きをするから忘れ物の無いように！」
「気をつけー礼」
『ありがとーございました』

お決まりの挨拶が終わり、１０分間の休憩時間が始まった。

「よう謙斗、流石だな」
「はっはっは≪話を逸らす者（エアーブレイカー）≫の二つ名は伊達じゃないぜ」
「それにしても見事だったな２０分も錬金術の事を話し続けるとは・・・・」
「ったく折角錬金術の理論を考えてたのに時間が潰れちまった」
「本当に考えていたのか・・・・」

《キーンコーンカーンコーン》

「あー予鈴なっちまった」
ガララッ
「さっさと座れー」
二時限目の教科の教師が入ってきてそう言って二時限目が始まった。

つづく

錬金術の基礎理論は難しい（後書き）

どうも心眼です
今回も短いですが付き合っていただいてありがとうございます
これらの出来事はすべてフィクションです
一度言ってみたかったんですよねこれ（笑）
ではまた会いましょう！

小学生にできるのなら俺でもできるであろうバスケ

二時間目「体育」

体育は苦手だ、何故ならば居眠りが出来ない。
体を動かすのは嫌いじゃないんだけどな
「今日はバスケだー、怪我しないよう適当に頑張ってくれー」
体育の教師「中松（なかまつ）　庄司（しょうじ）」は見ての通り適当な性格だ。
「さて、どうするか・・・」

本気で行く・最初だけ本気で行く・適当にいく

選択肢は三つある、がもうすでに選択肢は決まっている。
「最初だけ本気で行くか・・・」
あとは味方に任せればいいと思うしな。
「ぼちぼちいくかー」
「おお謙斗、同じチームだな」
「ん？　正也か」
「おう、よろしくなー」
「最初に飛ばしてあとはまかせるわ」
「おっけー」

ピピーッ

「始まったか・・」
ジャンプボールで味方にボールが回った。
「こっちにパスしてくれー」
俺はそう味方に言った。
が、しかし・・・・

俺にボールを渡すルートに敵が居る。
「邪魔だなぁ・・・・」
「俺に任せとけ」
「おっけー、まかせたぜ」
そう言って正也は巧みなステップでボールを奪った。
「ほらよっ」
「ナイスだ」
正也からボールを受け取り。
「狙い撃つぜ！！！」
そう言い放ちながらラインの一歩手前でボールを放つ。

ストッ

誰もが目を見開いて絶句していた。
「3ポイントゲット～♪」
「ＯＯネタは古くねぇか？」
そんな事を言いながらハイタッチをした。
「柳本をマークしろ！！」
俺をマークしたところで意味はないと思う、何故なら・・・
「うぉっ！　いつの間にそんなところに！！」
「柳本をマークしてるのは誰だ！」
「なんかもぉぐちゃぐちゃだぁぁぁ！！」

ってな感じに、チームワークの欠片もない状況だ（笑）
「ふはははは！！　俺止めるにはア〇ダーソン君でも呼ぶんだな！」
「冥界からの使者を呼ばないと駄目なのかー！？」

～試合終了～

結果　４９点：０点

「しまった・・・後半はサボる予定だったのに・・」
「夢中でやってたからなお前」
やってもたーと心で叫びながら授業が終わった。

「気を付けー礼」

『ありがとうございましたー』
「あじゅじゅしたー」
なんか挨拶するのもめんどくさくなって高校生なのにちみっこい主人公みたいな感じになってしまった。
「疲れたー」
余裕かました発言をする、だが行動力は尽きた気がする。
「柳本ぜひバスケ部に！！」
絶対にそう来ると思った・・・
「すまん、俺もう部活入ってるから無理だわ」
「え？　何部なんだ？」
「亜空間研究部だけど・・」
「もったいねぇなぁー」
「すまないが諦めてくれ」
「ああ・・」
亜空間研究部ってのは、日々亜空間の開き方や亜空間を利用した発明などを模索する部だった・・・らしい、現在はＵＭＡや超常現象の真相を明かそうとしている、もうオカルト研究部でいいだろ・・・
さて、次の授業は・・国語か、だが俺にはあいにく国語による夢への誘いの耐性はない。
そしてスーパー眠気大戦が始まったり始まらなかったりする。

つづく

小学生にできるのなら俺でもできるであろうバスケ（後書き）

どうもー心眼です
相変わらずこの作品はフィクションです
「あ、これ俺の高校じゃね？」
と思った人それは気のせいです、あとリア充爆発しろ
では次回また～

変な夢見た・・・

3時限目「古典」

古典の授業が始まり・・・偉人たちの俳句がクラシックの様に脳内に鳴り響いている・・・

（もう・・・無理ポ・・・）

やっぱり眠気には勝てねぇなぁ～とか思いながらまどろみに身を任せて俺は夢の世界へと旅立った━

━「ここは・・？」

気が付くとコックピットの中にいた。

何かを思い出したかのように俺は叫ぶ。

「ケント・ヤナギモト出るっ！！」

Gを体感しながら射出口から俺の乗っている機体が飛び出した。

「敵・・・あれはっ！？」

目の前にア○トアイゼ○リーゼとザイ○スターが仁王立ちしていた、勝てる気しねぇなおい（笑）

まさかのスパロボOGの主人公格×2だった。

それに対して俺の機体は・・・

「俺の乗っている機体は・・・・え？　ジ○ライト○ーマー？」

量産型を格闘に特化させたために装甲を薄くしたタイプのジ○だった。

「一発でも喰らえば即死だな・・・つかこれ何て言うスパ○ボだよっ！！」

どちらかと言うとス○ロボよりもアナザー○ンチュリーの方が近いかもしれない。

ジム○イトアー○ーの装甲はかなり薄い、どんなに弱い攻撃でも致命傷になってしまうので俺はすべての方向に気を張り巡らせた。
「そこか！！」
ティィィィィン！とか言う擬音が出そうな反応速度で俺はザイ○スターからの一撃を避けた。
「武器は・・・ビー○ジャベリンか・・・十分だ！！」
俺は瞬時にビーム○ャベリンを展開しア○トアイゼンとザ○バスターに立ち向かった━

━「コラァァァァァァッ！！」
「あいてっ」
不意に頭を固い物で叩かれた、脳天は痛い・・・・
「私の授業で寝るとはいい度胸だな柳本ぉ！！」
人が心地よく寝てたって言うのに何だよ・・・全く。
「そんなに寝たいんならここで勝負するかぁ？」
「あーはいはい勝負なら放課後受け付けますからーどうどう」
「私をそんな馬をなだめるような掛け声でなだめるなぁー」
「じゃぁ・・よしよし・・・」
教師相手にこんなことしても良いのか分からないけど、俺は頭をなでる。
「えへへへーじゃないわっ」
「若干のってましたよね先生」
「うるさいっ」
今俺に遊ばれて頬を赤くしているのは国語の教師「金澤　翔子」とっても弄りやすいしとっても面白い、そんでもって格闘家であるが俺には勝ったことが無い、経験の差ってやつだ。
てかさっきから出席簿に叩かれてるんだが・・・痛い痛い。
「出席簿で叩かないでください、地味に痛いです」

「こんなもん痛くないだろ」
「じゃぁ喰らってみます？」
そう言って俺は出席簿をスッと盗って構えた。
『おおっ』と歓声が沸く。
「いつの間に盗ったんだ！？」
「俺の前世の一つは≪盗人（シーフー）≫ですよ」
「ありえないわっ」

《キーンコーンカーンコーン》

「気をつけー礼」

『ありがとうございましたー』
「あじゅじゅしたー」

「はいはーいもう授業は終わりですからこれ以上は突っかかってこないで下さいねー」
「くそっ・・・今日の授業はここまでだー柳本覚えとけっ！！」
「捨て台詞ですか、しかも雑魚っぽいですね（笑）」
「うーるーさーいー！！」
そう言って職員室へと帰って行った。

そして授業の後の正也との会話。
「俺の大勝利だぜー」
「あの先生に勝てるのはお前しかいないな」
「はっはっはっそう褒めるな」
「国語は眠くなるからなー」
「変な夢を見た・・・」

「どんな夢だ？」
「ジ〇ライトアー〇ーでアル〇アイゼンとザイ〇スターと戦った」
「それ無理ゲーじゃねえか（笑）」

《キーンコーンカーンコーン》

「次は芸術か・・俺は音楽だな、お前もだろ？」
「ああ、そうだ」
「ダッシュで移動するか」
「おうよー」

そうして授業開始の１０秒前に教室についた。

つづく

変な夢見た・・・（後書き）

あとがきメンドイです
ってことでさよならー

職業的に駄目なロリコン

４時限目「音楽」

はっきり言って俺は音楽は筆記よりも実技の方が好きだ。
て言うか音符とか休符とか中学で習ったっつーの。
あー今すげぇ歌いてぇ・・・・
しかし、歌えないので叶いもしない要求が頭の中で渦巻いていく。
今このテンションならまずｊａ○ｐｒｏｊｅｃｔあたりでテンション上げてア○エリオンを歌ってトドメにリトル○スターズでも・・・あー両声類になりてー、高い音でないからサビの部分きついんだよな・・・
頭の中で曲順を決めていく、虚しすぎる・・・虚しすぎるので仕方無くハミングで妥協しておいた。

1. 「Ｍ○ＸＯＮ」ハミングｖｅｒ
2. 「創世のア○エリオン」ハミングｖｅｒ
3. 「Ｌｉ○ｔｌｅ　Ｂｕ○ｔｅｒｓ！」ハミングｖｅｒ

うん・・・どれも名曲だねっ！！
・・・でも歌えない・・・今は歌いたいんだよぉ！！
俺の要求不満は頂点に達したっぽく気が付いたらアルト○イゼン・リーゼとソーラーア○エリオンと○樹をノートに書いていた、自分でもびっくりするぐらい書き込んでいる。
「しっかりノート書いてるかー」
ぼけーっとしていたため反応が遅れた。
「何書いてるんだ？」

「気が付いたら書いてました、多分旧文明人にでも乗っ取られたと思います」
果たしてこのネタが先生に通じるだろうか。
「お前は太陽王にでも乗っ取られているのか」
通じたようだ、と言うかこの学校の教師はオタクが多いな。
このファン〇シースターネタが通じたこの先生は「田中　太郎」この名前を付けた親御さんはどれだけ適当なんだ・・・・
「俺はヴィ〇ィアン派何ですが先生は？」
「先生はル〇ア派だなー」
何だ教師じゃなくてただのロリコンか・・・だけどそれって先生として駄目なんじゃないのか？
「エミ〇アはどうですか？」
「断然ありだな」
・・・警察に通報してもいいっすかね？
「先生はロリコンですか」
「世間ではそう言われるかもしれないな」
「さて・・・通報通報っと」
「うぉい！？」
「汚物は焼却ですよ先生」
「それを言うなら消毒だ！！」
「むしろ滅却の方がいいかもしませんね」
「俺の死体すら残らないのかよ！！」
「その方が世間的にありだと思いますよ？」
「一体何がありなんだー！？」
「強いて言うなら・・・処理方法ですかね？」
「なんだと！？　と言うかお前もロリコンだよな柳本？」
「いえ、俺はロリコンでもあるんですよ。基本的にＢＬ以外ならオールオッケーですよ」
「こいつ・・・できる！？」
そんな感じで時間はどんどん過ぎていった━

「気つけー礼」
『ありがとーございましたー』
特に授業してないけどなっ！！

「もう昼かー購買行かないと・・・」
「またあれするのか頑張れよー」
いつものあれってめんどくさいんだよなー
そう思いながらも俺は足早に教室へ戻っていった。

つづく

職業的に駄目なロリコン（後書き）

めんどくさいんで（ｒｙ

WOR OF THE KOUBAIBU

午前の授業ももうすぐ終わる、あと数分で昼休みだ。
でも俺は弁当をいつも持ってきてない、理由は簡単だ、面倒くさいから。
俺は親元離れて親戚一人と暮らしている・・・と言っても大体の家事をやらされるのは俺だが・・・
だから弁当は自分で作らなきゃならない、でも毎朝作るのも面倒くさい。
考えた末に出た結論が。

【そうだ購買へ行こう】

この学校にも食堂は有るけど、ぼったくりな価格の為一部の金持ち生徒しか行かない。
ああ、言い忘れていたけどこの学校は私立だ。
だから、金持ちの学生もいれば俺の様な平凡な学生もいる。
だがこの学校には購買部という場所は無い、矛盾しているようだが購買部と言う場所が無いだけで購買部はある。
ここの購買部は移動型なのだ、正確には大型ワゴンを店として改造したものだ。
この学校の生徒で弁当を持ってきているやつはあまり居ない、何故なら大半がこの購買部のパンを買うためだ。
この購買部のパンはコッペパンでもめちゃくちゃうまい、でも一番うまいのはメロンパンだ。
しかし何故か一日2つ限定しか売られない、あれ売れると思うのになー

≪キーンコーンカーンコーン≫

『ありがとうございましたー』

号令のあと俺は疾風のごとく教室に戻り財布を取り、窓から校庭へ飛び出した。

ここは四階だがそんな事は関係ねぇ！！　全力でダッシュだ！！

キノコもダッシュボードもいらねぇぜ！！

そうして俺は一番最初にワゴンの前に着いた。

ガラガラとワゴンのシャッターが開き店員のお姉さん「宗田（そうだ）　沙希（さき）」さんが顔を見せた。

名前は初めて来たとき教えてくれた、でも他の常連の人たちはパン屋のお姉さんと読んでいて名前を知らないようだ。

本人曰く気に入った子にだけ教えているらしい。

おんなはみすてりーだ・・・

「沙希さん、メロンパン2つとチョココロネ3つとコッペパン1つね」

「メロンパンは京子ちゃんに買っていくの？」

「そうですよ」

「彼女の為に一番に買いに来るなんて妬けちゃうわね」

「べっ・・別に彼女なんかじゃないですよ」

「またまたぁ～」

「かっ・・からかわないでください！」

そんな風に話していると体育会系の先輩が走ってきた。

「パン屋の姉ちゃん、メロンパン2つくれ！！」

「ごめーんいま売り切れちゃった」

「何だと！？　お前何で2個も買ってるんだ！！」

「別に一人ひとつとか言う決まりは無いはずですよ？　ですよね沙希さん」

「そうよ早い者勝ちなんだから」

「うるせぇ！！　さっさとメロンパンをよこせ！！」

「はぁ？　これは俺が買ったんだから俺のですよ」
「お前のものは俺のもの、俺のものは俺のものだ！！」
「先輩はどこぞのガキ大将ですか？」
「２１世紀にもなってこのセリフを言う人が居るとわねぇ」
「うるせぇ！！　こうなったら実力行使だ！！」
「はっはっは俺に勝てるとでも？」
「でも相手は柔道部主将よ？　勝てるの？」
「主将だろうが達人だろうが俺は負けませんよ」
「勝負だ！！」
「すいません沙希さん、パンあずかっててもらえます？」
「はいよー、頑張ってね」

戦闘開始

「さて・・・やるか」
「昨日の様にはいかねぇぜ！！」
弱い犬ほど何とやらと言うが、まさにそれだ。
弱いが・・・一応まずは出方を見るか・・・ちなみに得意技すべては我流である。
「さっさと済ませましょうか」
俺はただ静かに構える、先手は先輩にくれてやる・・・と言うか攻撃されないと攻撃できない構えだ。
「最初っからそのつもりだぁぁぁぁぁうおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
単純に殴りかかってきた、アホだ・・・よく主将になれたな・・・
呆れて声がでねぇ・・・まぁ・・・やらせてもらおうか。
「我流合気道　流水一本背負い！！」
殴りかかってきた先輩の腕を勢いが弱まらないように掴み足を払い投げた。

ズドンッ！！

格闘技系の人は大抵図体がでかいため、軽く投げると自分の体重で勝手に潰れてくれる。

「流るる水の如く」

決め台詞を言った直後に先輩は気絶した、完全勝利だな。

そこまで強くなかったから経験値は1ってところだな・・・

「そう考えるとスライム並みに経験値低いな」

主将なのにこれだけ弱いってうちの柔道部どんだけ弱いんだよ・・・

そう呆れていると沙希さんといつの間にか周りにいた一般生徒たちが拍手していた。

「謙斗くんやるねぇ」

「今ので惚れちゃだめですよ」

格好つけて冗談でそんな事を言ってみた。

「大丈夫初めて会ったときから惚れてるから」

「・・・・・・え？」

・・・・・・エ？

ナンテイッタコノヒト。

「冗談ですよね・・・？」

「冗談なわけ無いじゃない」

いつの間にかフラグが立ってたっぽい。

「初めてってワゴンに最初にきて少し話しただけじゃないですか」

「あーやっぱり覚えてないかぁ」

過去に会ったことがあるのか・・・・覚えてないなぁ・・・・

「どこかで会ったことありましたっけ？」

「んー教えない♪」

すっげー気になる。

「俺もう教室に戻りますね」

「じゃあまた明日ねー」

「はいー」

俺は購買部から去り、軽快に屋上へと向かった。

つづく

WOR OF THE KOUBAIBU（後書き）

はろはろー心眼です
ちょっち仕事で小説（読み切り）書かなきゃならなくなったんで更新遅れるかもです（元々遅いけどなっ！！）
では次回また会いましょーノシ

戦いの後の一時

購買部での戦いを終え、俺はパンの入った袋を持って屋上へと全力で走っていた、早く行かないと昼休みが終わっちまうしな。
「だっしゃらあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
そう叫びながら階段を駆け上っていく。
今階段を上っている南館は４階＋屋上で構成されている、現在は３階へと向かう階段を上っている途中だ。
「次で４階っだわぁっと！？」
急に階段の角から一人の女子が飛び出してきた、あまりにも急だったため避けれずにぶつかってしまった。
「いててて・・・大丈夫ですか？」
俺としてことがぶつかってしまうなんて・・・相手の方は大丈夫か？
「だいじょーぶだいじょーぶ」
この若干ふざけたような喋り方は・・・・急いでこの場から逃げなければっ！！
「そうですか急いでるんでまた後でっ」

がしっ

思いっきり制服の裾を掴まれた・・・・逃げれない・・・
「人にぶつかっておいてそれは無いんじゃないかなヤナソン君」
「人を名探偵の助手みたいに呼ぶ人の対応はこんなもので良いんですよ、浅瀬川先輩」
俺の制服の裾を掴んで離さないこの先輩は２年の「浅瀬川（あさせがわ）　涼子（りょうこ）」先輩、俺と同じく亜空間研究部所属の秀才なんだけど特殊な先輩だ、一言で言うとめんどくさい先輩だ。
「慰謝料としてメロンパンをよこしなさい！！」

「あんたはそれが目当てだろ！！」
「・・・・・ソンナコトナイヨー？」
「目ぇ逸らすなやコラ」
「証拠は？」
「強いて言うなら9回連続で1日1回この時間・この場所でぶつかることですかね」
「わぁ次で2週間れんぞくだねぇ」
「では俺はこれでー」
「待ってぇーメーローンーパーンーほーしーいー」
本音出てるし、めんどくせぇー・・・・
この状況をどう打破するべきか考えていると、救いの女神が来た。
「こーらっ涼子何階段で騒いでるのって、柳本君じゃないのぉ」
「明道先輩、こんにちわ」
「こんにちわぁ、どうしたのこんなところでぇ？」
「見ての通りですよ・・・」
この人は≪明道（みょうどう）　晴菜（はるな）≫先輩、この人も浅瀬川先輩と同じく亜空間研究部所属、浅瀬川先輩の扱いは校内一、それに秀才で優しくて浅瀬川先輩とは真逆の性格だ。
「げっ・・・晴菜」
「あらあらぁ何をしていたのかなぁ、涼子ぉ？」
「ナンデモナイヨォー？」
「明道先輩、後は任せますね」
「はぁい柳本君に任されちゃったから頑張っちゃうよぉ」
あの人なら涼子先輩を何とか出来るだろう。
二人の先輩を後にして俺は階段を駆け上った。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」
・・・屋上へと上る階段を登る途中で浅瀬川先輩の悲鳴が聞こえた気がするがそれは本当に気のせいだろう。

ガチャ

屋上には清々しいほどの青空が広がっている。

「遅いよー謙君」

そこで待っていたのは京子・正也・井藤のいつものメンバー・・・・＋α

「何で浅瀬川が居るんだ？」

「居たら悪い事でもあるの？」

「お前もどうせメロンパンが目当てなんだろ？」

「・・・・ソンナコトナイヨー？」

流石、浅瀬川シスターと言うべきか。

察しの通りこいつは浅瀬川先輩の妹の「浅瀬川（あさせがわ）　小波（こなみ）」姉妹そろってこれだからめんどくさい。

「そ・・そんなことより早くしないと昼休み終わっちゃうよ？」

「それもそうだな、ほいよメロンパンだ」

「いつもありがとー謙君」

「いいってことよ」

俺は買ってきたパンを食べながらふと京子と正也の紹介をしていなかった気がする。それじゃあこの場で紹介させて貰おう。

・・・・あれ？　でも誰に説明してんだ？

これはまさか宇宙の意思ってやつですか、世界には不思議がいっぱいですな。

まずは京子から、本名「狭川（さがわ）　京子（きょうこ）」最初に言った通り俺の幼馴染だ、ついでに俺や正也、井藤ほどではないがオタクだ、好きな物はメロンパン・好きなゲームの種類は女子では珍しいギャルゲー、俺のせいでオタク趣味が感化した感じだから若干罪悪感がある。

次に正也、本名「郷（さと）　正也（まさや）」俺の親友だ、俺と同じオタクでよく教室で話している、

好きなアニメのジャンルの多くが俺と同じの為よく気が合う。

ちなみに二人とも亜空間研究部所属だ、結構この部って人多いんだよなー・・・・
「そういえばよ凄かったな今日も」
「そうだねーズバァッて感じだったねー」
「ありゃ主将さんはかなりの精神ダメージを受けたんじゃないかな」
「お前ら見てたのか」
「そりゃあ校庭であれだけ騒いでたら誰でも気付くでしょ」
「あれだったら正也の方が数百倍強いな」
正也と俺の力は互角だ（ゲームの腕的にも）多分校内で俺と一・二を争うぐらい強い、そのため時々名誉目当ての不良どもに絡まれる、めんどくせーけど逃げるわけにはいかないから半殺し程度でいつも済ます。
「さて、最後にとっておいたメロンパンでも食うかね」
ちなみにチョココロネはでろんとさせながら、コッペパンは「ららコッペパン～♪」とハミングさせながら食べた、共通して元ネタのアニメが被ってる気がするがそこはスルー。
メロンパンを食べようとした時、横からすごい視線が・・・・
「おい、浅瀬川・・・お前そんなに欲しいのか？」

コクコク

無言で強くうなずいた、しかもよだれの大洪水。
「半分やるからとりあえずよだれ拭け」
「やったーやっと伝説のメロンパンが食べれるよー」
俺はメロンパンを二つに割って浅瀬川に渡した。
「おいひいーもう死んでもいい・・」
「大げさだな・・」
「一生ついていきます、師匠！！」
「俺はお前の師匠になったつもりはないし、お前はメロンパンが食べたいだけだろ」

「・・・ソンナコトナイヨー」
「そのセリフ今日三回目だわ」
「私二回しか言ってないけど？」
「お前の姉の涼子先輩もお前と同じようにたかってきたんだよ」
「あはははは―流石姉妹だねー」
駄目だこの姉妹何とかしないと・・・
本格的にこの姉妹の対策を立てなければならないな、そう思った昼下がりだった。

つづく

戦いの後の一時（後書き）

おっす俺心眼！！
予約しくって書きかけなのに投稿しちゃったっぽいです
すいませんでした
では次回ノシ

そして日常は非日常へ（前書き）

少し内容の方を変更したので読み返しちゃったりしてください。
では今回のお話の始まり始まり～

そして日常は非日常へ

屋上で昼食を食べた後俺は、昼下がりの木陰で先での戦い（浅瀬川へのツッコミ等）で暑くなった身体を冷ましていた。昼下がりの木陰っていうのは日向とは真逆の涼しさがあり、今日のように春なのに夏のように気温が高い日にはありがたい。

「あー、あちぃ」

浅瀬川姉妹には平日に一回は会い、そして突っこまされる。それに無駄に体力があるために持久戦になることが多い、今日はまだ短い方だ。

「あーもう、教室に戻らなきゃなー」

携帯の時計を見て俺はそうつぶやき、木陰に未練を残しながらもその場を去った。

教室にはクーラーが付いているが、俺は人工的な涼しさってのはどうも苦手だ。

折角涼んだのに日向の中歩いていかなければならない。

・・・・あちぃ・・・干からびそう・・・

歩きながらふと空を見上げた。

「ん・・？」

空から小さくて黒い箱の様なものが落ちてき・・・

ゴスッ

気が付くとＺＺゼータの頭部ハイパーメガランチャーに当たる部分（要するに額（ひたい））に角がクリーンヒットしていた。

すごい速さで落ちてきたんだなーと思いながら俺は気を失った――

――気が付くと俺は保健室のベットに横たわっていた。
時計を見ると４時半、もう放課後だ。
額に手をやると包帯が巻かれていた、包帯まくぐらいなら病院に連れて行けや、そう思っていると一人の女性がやってきた。
「あら、気が付いた？」
この人は看護教諭の「穂田（いなだ）　恵美（めぐみ）」、看護教諭なのに外科医の免許を持っているらしい、何故に？
あと、年下好きらしい・・・この状況やばいな・・・一刻も気を抜いてはならない状況だ、でも百合とも聞いたことがあるな、なら大丈夫か、・・・いや同性愛者のことをとやかく言う気はないが、教師としてどうなんだろうか。
「びっくりしたわよ？額から血を流して校庭で倒れてるなんて」
「そういえば、空から何かが落ちてきて・・・」
「これのこと？」
そう言われた先にあったのは四角い箱だった。
見る限り四角い、色は黒、真っ黒、大きさは約１０？四方、あと角は素晴らしいほど尖っている。
・・・俺、確か角にあたったんだよな・・・よく包帯を巻く程度だったな、本来なら数針縫うぞこれ。
額の包帯に手を当てるとズキッとした。
「これなんなのかしらね？」
もうちょっとけが人に気をかけろやと一瞬思った。
しかし俺も一応興味はある。
「ちょっと貸してもらえますか？」
そう言って渡してもらうと黒い箱が光を放ちながら開いた・・・
え？
中には・・・・

「青色のメダルと・・・手紙・・？」

おい、あれか？　このメダルをベルトに入れるのか？
それか自動販売機にでも入れるのか？
しかも、開けてから数秒後黒い箱は跡形もなく消えた。
不思議だ・・そして謎すぎる。
それにこの手紙・・・
「なんて書いて・・・これ何語なの？」
「古代アトランティス語ですね・・」
すでに滅びた文明の文字・・・だと！？
「何で知ってるの？」
「ちょっとばかしかし小〇館でね・・・」
さすが小〇館、為になるな。
「これ何て読むの？」
「えーとなになに？」

―はろはろーこれ読んでいる人、元気してるー？
もうチョイでアトランティス大陸が沈んじゃうんだよねー
ってことで、私の最高傑作の子を預かってほしいんだよね。
じゃっ、私もう冷凍睡眠（コールドスリープ）装置に避難しなきゃだから
またねー

かしこ―

・・・・・って、なんでやねぇぇぇぇぇぇん！！！
ほんまもう、ツッコミ所しか無いやんか、これ！！
この時代にもうすでに「かしこ」ってあったんやな、おい！！
しかもノリめっちゃ軽いな！！
衝撃的過ぎて素の関西弁出てもうたやんか！！
※この話は関西圏を舞台にしていますが関西弁では書きにｋ・・
読者さんが読みにくいと思うので標準語で書いていますｂｙ作者

「・・・・・冷凍睡眠装置（コールドスリープ）って本当にあったのね・・」
「そうですね・・・・」
・・・今日一番無駄に過ごした時間だったかもしれない――

あれから稲田先生に包帯を変えてもらい、無事帰宅した。
「ただいまー」
同居している親戚から返事は無い。
不在のようだ。
俺は気にせず、自分の部屋へ向かった。
「あー、疲れたー」
頭からベットに倒れる、そして数十秒じっとしていると・・・・

ピンポーン

俺は慌てて玄関へ行き、ドアを開けた・・・が誰もいない。
「ふむ・・・ピンポンダッシュか？」
そう言ってドアを閉めようとすると・・・

ヒュルルルルルルル

まさか・・・
「本日二回目か・・・」
一日に物が二回落ちてくるなんてまさに、
「不幸だぁーーーーー」
某上条さんのセリフをやる気なく言ってみた。

ズドォォォォォォォォン！！

あー落ちてきたきた、今度は冷蔵庫くらいでかい箱が落ちてきた。
相変わらず黒い、やっぱり真っ黒、今度は長方形の柱と言うべき形だ。
そしてまた光りながら開いていく・・・
アトランティス人は派手な演出が好きと・・・無駄な知識がまた増えた。
中から現れたのは、メダルや手紙ではなく・・・青髪ロングヘアーな一人の可憐な女の子。
女の子。
女の子？
「女の子っ！？」
予想外すぎて反応が遅れた。
驚いていると、女の子が口を開きこう言った。

―貴方が私のマスターか？―

・・・ではなく、

―私の主であるという証拠を差し出してください―

なんのことだろう、と一瞬思ったが多分メダルのことだろうと理解した。
「これのことか？」
躊躇なくメダルを見せると――

―指紋認証、貴方を私の主と認識しました―

――そう言ってその場に倒れた。
これが日常から非日常へとトランスフォームした瞬間であった。

つづく

そして日常は非日常へ（後書き）

こんにちわ、今日の心眼です
はっきり言って書くべきことは前書きに書いたので書くこと無いです
ってことでさよなら、さよなら、さよなら。

俺の血筋の特殊性

「・・・・でこの子誰なのかな？」
黒い箱から出てきた謎の美少女が倒れた時ちょうど帰ってきた親戚の「穂見浦（ほみうら）　香苗（かなえ）」姉さんに質問攻めにされていた。
「空から黒い箱が落ちてきてその中から出てきて俺のことを主とか言って倒れた、名前・年齢・出身・その他諸々は不明、Q.E.D（証明完了）」
なんか専門用語が出てきた。
「証拠はあるのかな？」
証拠・・・？　ふっ・・それは自爆だぜ姉さん・・・これで勝つる・・・かも！！
「証拠はこれだよ・・・」
そう言って俺は謎のメダルと手紙を渡した・・・あれ？　正直勝てるかどうかよく分からない証拠だな？
「・・・・・！？」
姉さんの目つきが変わった。
「どうかした？」
「そう・・・この子は・・・」
それだけですべてを悟ったようだ、・・・脱出ゲームでありそうなくらい不透明すぎるこのアイテムでよく悟ったな。
「で、この子どうすんの姉さん」
「うちで飼うことにしようかな」
「飼うって・・・」
せめて泊めてあげると言えよ。
「じゃあもう飯にするか・・」
「わーい♪」
俺はいまいち納得できないまま晩御飯を作り始めた――

―謎の美少女の分も作ったのでいつもより時間がかかってしまった。
「姉さん、出来たよー」
毎日晩御飯を作らせられるから大抵の料理なら作れるようになった。
「今日はハンバーグかーおいしそうだねー、いただきまーす」
「で、この子起こす？」
「もぐもぐ・・大丈夫・・もぐもぐ・・もうすぐ・・もぐもぐ・・起きると思うから」
「口に物入れながら喋らない、てか分かるの？」
そう言った時、謎の美少女が起き上った。
「ここは・・・」
「姉さんの予言が当たった・・・」
「私だってやるときゃやるわよー」
今はそのやるときではないと思う。
「・・・おはようございます、ご主人様（マスター）」
「ああ、おはよ・・・ご主人様（マスター）？」
「ええ、私はあなたの錬金術師（アルケンティナ）の従者です」
「あるけ？　まぁそのことは後で聞こう、まずは晩御飯を食べようか」
「肯定します」
少しさめてしまった料理を少しがっかりしながら食べ始めた・・・自信作なのに・・・―
―食べ終わった食器を流しに置いて聞きたいことを聞き始めた。
「まず名前、出身を答えてもらおうか」
「私の名前は無く、最高傑作と言われてました、出身というより錬造（れんぞう）された土地はアトランティスです」
「錬造って何だ？」
「錬金術によって何かを造りだすことよ」

謎の美少女に聞いたつもりだったが姉さんが答えた。
「知ってるの？　姉さん」
「私たちのご先祖様って知ってる？」
何でご先祖様の話になるのかは謎だが昔聞いたことがある。
「確か錬金術師だとおじいちゃんに聞いた事がある」
「そう、私たちのご先祖様は錬金術師よ・・・アトランティスのね」
「！？」
ナ、ナンダッテー、おにーさんビックリだよ。
「でも、失われた技術（ロスト・スキル）だから原理がよく分からないのよね」
「あ・・・・」
・・・・なんか心当たりがある。
「どうしたの？」
「姉さんこれ・・・」
「何これ？」
渡したのは一枚の紙切れ。
「学校の理科の授業中に錬金術の基礎理論考えたのを紙に記してみた」
・・・まさかあれが伏線だったか。
「これは！？　すごい・・・そう言うことだったのね！！」
「えーと・・・役に立った？」
「役には立ったけど何で書きかけなの？」
「うっ・・・それは」
それから先の理論がねぇ・・・
「流石、ご主人様（マスター）です、何も知らないのにここまで出来るとは」
そう言って謎の美少女は俺に助け舟を出した。
「お前は錬金術の基礎理論を知っているのか？」
「肯定します、私は錬金術師（アルケンティナ）の従者ですから」
そう言って俺の持っていたシャーペンを奪い、俺の書いた基礎理論の続きを書いていく。
「あー、なるほどそういうことか・・」

もっと俺に柔軟な思考があれば解けていたかもしれない。
「これで基礎理論を立て終わりました」
「ふむ、これなら俺もやってみるかな」
そう言ってクリップを取りだしてやってみた。
「しかしご主人様（マスター）、術を使うには理解をしないといけません、現代的に言うとソフトをインストールするようなものですから」
何で古代アトランティスで生まれたのに今の言葉を使いこなしてんだこいつ。
「逆に言うと理解していればだれでも使えるんだな？」
「そうですけども、もし失敗したらご主人様（マスター）の命にかかわります！！」
「ふっ、舐められたものだね、途中までとはいえ基礎理論を俺は立てた俺に不可能はない！！」

―我、万物の命の形を変える者、今我の望む形と命を変えん―

突然脳裏にこの言葉が浮かび上がった。
「これは！？」
何とクリップがあった場所に光沢のある球体の物体がある。
「成功だ！　キタコレ！！」
「これは何なの？」
「磁石をこれに近づけてみて」
姉さんは磁石を球体に近づけた、すると・・・球体は磁石に近づいていく。
「これってまさか！？」
「そう、アルミのクリップから鉄球に組み替えてみた」
「・・・流石ですご主人様（マスター）」
「錬金術って形状も変えられるんだな」
「肯定です、剣や銃、戦闘機や車も造れます」
「・・・そして人もか」

「・・・気付いていらっしゃったのですね」
今さら気付かない方がおかしいだろ。
「まぁな」
「しかし、人を造るには賢者の石が必要になります」
「万物を司る石か・・・」
「肯定です、賢者の石のレシピは封印されていましたが、私の錬造者と一部の錬金術師は賢者の石のレシピを知っていました」
「じゃあ、お前は人造人間（ホムンクルス）なんだな？」
少し驚きながら謎の美少女は答える。
「・・・肯定です」
錬金術師の従者、いや道具と言うべきか、人の形をした人ではない生物。
そして普通の人よりも高い身体能力を持ち、生物兵器の如き戦闘力をも持つ・・・と何かの書物で見た気がする。
「お前の錬造者はどんな人だったんだ？」
「私の錬造者は美しく、優しく、幼い人でした」
「幼い？　年齢がか？」
「年齢はご主人様（マスター）くらいでしたが、とても無邪気でした」
俺ぐらいの年齢で、精神年齢が幼いのか・・・一度見てみたいな。
「そして、錬造者は私のほかに5体人造人間（ホムンクルス）を持っていました」
「でも、その中で一番出来の良かったのがお前ってことか」
「肯定です」
手紙に書いてたもんなぁ・・・
「まぁいい、お前は今は俺の従者だしな」
「・・・認めてくれるのですか？」
「頼まれちまったからな、お前の錬造者とかやらに」
「ありがとうございます」
俺自身も錬金術のことをもっと知りたいしな。
「錬金術の基礎理論を教えてくれた礼に名前をやる」
「本当ですか！？」

初めてこいつが嬉しそうにしているのをみたな、もとが美少女だからすげぇ可愛い。
「そうだな・・」
俺は手元にあった鳥の図巻を手に取り開けたページを見た。
「この名前なんてどうだ？」
そこに書いてあったのは≪コルリ≫という小鳥の名前だった、オスは青く、腹部が白い、メスは褐色の鳥だ。
「コルリ・・？」
「そうだな、コルリ・A（アトランティス）・ホミュラーってのはどうだ？」
ホミュラーってのは姉さんの名字≪穂見浦≫からきている、ダジャレだな。
「コルリ・A（アトランティス）・ホミュラー・・・・・」
「気に入ったか？」
「肯定です」
「じゃあ、お前は今からコルリだ」
「肯定です、ご主人様（マスター）」
そして夜は更けていく・・・

つづく

俺の血筋の特殊性（後書き）

ちわー心眼です
我ながらよくこんだけルビが思いつくなと思います。
急展開過ぎてワロタｗｗｗとかいうコメントは控えてくださいね。
では次回また会いましょーノシ

ストリートバトル！！

あの騒動から一夜が過ぎ、平和な朝がやってきた。

「平和って素晴らしい・・・・」

そう、しみじみ思う・・・

「何を言ってるんですかご主人様（マスター）、そんな魔王を倒した後の勇者みたいなこと言って」

何で今のゲームの内容を知ってるんだこいつは。

「昨日はいろいろあったからな」

浅瀬川姉妹に柔道部主将、そして黒い箱・・・最後のは痛かったなー

「そうですか、それはそうと今日は学校へは行かないのですか？」

「今日は土曜日だから休みだ、定休日ってやつだな」

今日が土曜でよかった、土曜じゃなかったらコルリだけを家に置いてくことになるしな。

「そうですか、今日のご予定は？」

「特にないな」

「そうですか、香苗さまのご予定は？」

いつの間にかソファーに姉さんが座っていた、おにーさんビックリだよ。

「んーとねーそうだ！　コルリちゃんのお洋服を買いに行こうよ」

コルリの顔を見ると少しうれしそうにしていた、やっぱり女の子なんだな。

「私に・・洋服ですか？」

「そだよー」

「確かに、その格好は目立ち過ぎるな」

現在のコルリの今着ている服は何も知らない人が見たらコスプレだと思われそうな服だしな。

「分かりました、では行きましょう」
「まてぇい、俺たちの準備がまだだ」
こいつ急に普通の女の子になりやがった・・・結構可愛いとこあるじゃないか。
「では、お早めにご準備を・・・」
「従者が主に命令してどうする」
そう突っこんだがワクワクしているコルリの耳には届いていなかった。
「じゃぁコルリちゃんは私と一緒に着替えようかー」
そう言って姉さんの部屋へと消えていった――

身支度を終えた俺はコルリのいるリビングへと向かった。
「遅いよー謙君」
リビングには姉さんと・・・姉さんの私服を着たコルリが居た。・・・にしても・・・姉さんすごく気合入ってるな。
「さあ行こうかー」
「で、どこに行くんだ？」
「どこにいこうか？」
「・・・・・え？」
決まってねぇのかよ！！
「じゃあ三ノ宮に行くか・・・」
「そうしよっか」
三ノ宮と言うのはここらへんで一番近いセンター街で色々店があるところだ。
「早く行きましょう！！」
「分かったから、落ちつけ」
子供を持つ親の気持ちがよく分かってしまった今日この頃・・・
俺達はとりあえず駅へと向かった――

電車に揺られて約１０分、三ノ宮に着いた。
「人がゴミのようだ・・・略して人ごみ・・・」
「姉さんうまくないからそれ」
今日はやけに人が多い、特にイベントとかは無いはずだが・・・
「あそこのお店は洋服屋では？」
「そうだねーじゃっいこっか」
「俺はゲーセンにでも行ってくるわ」
「はいはいー終わったら電話するね」
俺は店をあとにしてゲーセンへと向かった、前方から見知った顔が・・・あれはまさか・・・
「およ？やぁやぁ柳本君じゃあありませんか」
「やほーこんなところで会うなんて奇遇だね、師匠」
・・・休日に最も会いたくない姉妹にあった。
「ヤナギモト？　ハテ、ヒトマチガイジャアリマセンカ？　デハ、ワタシハコレデ・・・」
まわれ右をしてさっきの店へ帰ろうと・・・・

ガシッ

「どこへいこというのかね？」
チッ・・・逃げれねぇ・・・
「今日はこんな所で何をしてるのかね？」
「ただゲーセンに行こうか「プルルルルルルルルルルルルッ」
ケータイが鳴った、今ケータイが鳴る理由は一つしかない・・・

ピッ

「もしもし・・・こちらＨＱ（本部）」
浅瀬川姉妹にコルリのことを知られると非常にまずいことになる、それだけは避けたい・・・だからそれを察してくれないか姉さん！！
『あ、もしもし謙君？　ＨＱってなーに？　お姉さん英語よくわかんないんだよ』
察してくれよ姉ーさーん！！
「・・で用件は？」
『あ、うんお洋服買い終わったからこっちに戻ってきてー』
「ＯＫ、では一時間後に落ち合おう・・・」
『何で一時間な━』
ピッ
「電話の相手は誰だい？　女の人の声だったけど」
「まさか師匠の彼女さんかな？」
この状況を打破するには・・・そうだ！！
おもむろにケータイのカメラを浅瀬川姉妹に向ける。
「なになに？　撮ってくれるのかな？」
「ぴーすぴーす」
浅瀬川姉妹はカメラにポーズを決める、ふっ馬鹿姉妹が・・・それが俺の狙いだ！！
「〇竹フラッシュ！！！！！」
浅瀬川姉妹の眼の前でフラッシュをたいた、よい子は真似すんなよ！
「うおっまぶしっ！！」
「目がー目がー」
浅瀬川姉妹がひるんでる間に俺は店に猛ダッシュした━━

「遅いよっ、お姉さんはご立腹だよ」
店の前で姉さんが立っていた、コルリの姿は無い・・・
「あれ？　コルリは？」
「ちゃんとここにいるわよ？」
姉さんの目線の先には店のドアに隠れたコルリが。
「何してんだ？」
「こんな格好はしたことないので恥ずかしいです」
「早く出てこねえと置いてくぞ」
「ううっ・・・笑わないでくださいね」
そう言ってドアから恥ずかしそうに出てきた。
「へぇ、可愛いじぁねぇか」
「お洋服は私が選びました～」
素材がいいために出来はかなりいい、それに姉さんが選んだ服はとてもコルリに似合っている。
「お、お褒めに頂き光栄です・・」
「確かにとってもかわいいねぇ～」
「こんな子がいたなんて何で言わなかったんですか師匠」
それには事情が・・・へ？
「くそっまた出やがったな」
「人を黒いGみたいに言うなー」
「そうだぞー」
浅瀬川姉妹との遭遇率《エンカウント率》高いなここ・・・
つかこんなに騒いでいいのか・・・？
でも、それにしてはやけ周りに静かだな・・・・
「・・・・・」
「どうかしたのかい？」
「・・・・おかしい」
「何がですかご主人様（マスター）？」
「さっきまで周りが騒がしかったのに急に静かになるなんておかしい」

「たしかにそうだねー」
「この時間はがやがやしてるのに不思議だねー」
「むむむ・・・超常現象の匂いがするよ」
そんな匂いねーよ、つーかどんな匂いだよ。
「！！」
俺は何かを感じ、反射的に首を少しずらした。
ヒュッ
一瞬首筋に何かがかすり、床に刺さる。
「あの距離から避けるなんてやるねぇ」
そう言って二階から妖狐の仮面をつけた女性が飛び降りてくる。
そっと後ろを見るとクナイが刺さっていた。
俺の第六感がこう告げている、こいつはヤバイと。
「みんな、下がってろ」
「ご主人様（マスター）、援護します」
「いや、いい・・・せっかく買ったのに汚しちまったら勿体ないだろ？」
「でも・・・・」
「これは命令だ、みんなを連れてお前も含めて無事に帰れ、分かったな？」
「肯定です、ご主人様（マスター）のご命令通りに・・・」
俺は相手に背を向けないように刺さったクナイを引き抜く。
「今回の目標はお主ではないのだがな、儂のクナイが避けられたのは初めてだ」
「それで好奇心ついでにどれだけ戦えるのかが知りたいと・・・」
「ふふっ、儂の考えを見抜くとは・・・お主なかなか面白いやつだねぇ」

「俺はそんじゃそこらの高校生じゃないんでな」
俺はクナイをまるで刀を構えるように仮面の女に向け、さっきから気になることを彼女に聞く。
「この人払いの術はお前がやっているのか？」
「ほぅ、気づいていたか？」
「気づかない方がおかしいだろ」
ちょっと前に読んでいたラノベで同じような状況があったのでピンときた。
「質問タイムはもう終わりだ・・・勝負を始めようじゃないか！！」
彼女はそう言うと殺気をむき出しにして構え、切りかかってきた。
クナイの攻撃は素早く受け流すのが精一杯だが、もう少し距離を広げられれば・・・
「結構もつじゃないか」
「だから言ったろ？　俺は普通の高校生とは違うんだよ！！」
俺はそう言いながら彼女のクナイをはじき、後ろへと大きく飛ぶ、この距離ならやれる・・・
「これで決める・・・」
「儂に勝つつもりなのかい？」
勝てるかどうかは分からないが・・・これが俺の切り札だ。
「お主の切り札を見せてもらおうか！！」
仮面の女性は距離を縮めに来る、俺はそれを待っていた！！
「我、万物の命の形を変える者、今我の望む形と命を変えん！！」
クナイとクナイが交わる瞬間にクナイを約０．１秒で錬金して刀へと造り変えた。
「錬金術！？」
「不意を突かれたのかい？」
俺は日本刀より小さいクナイを軽々と弾き飛ばし、無防備となった彼女の眉間へと刀を向ける。
「王手だ」
そう得意げに言う、なんか結構あっさりと終わったな。

「なぜ殺さないのじゃ・・・？」
「そんな理由もわかんねぇのか？」
「・・・・・」
結構単純な理由なのに分からないのか・・・仕方ねぇなぁ。
「あのなぁ、日本には人を殺しちゃいけないっていう法律があんだよ」
まぁ刃物を持ってんのも法律違反だけど・・・今回は正当防衛だから大丈夫・・・きっと！！
「敵に情けをかけられるとはのぅ・・・」
「情け？　勘違いしているようだが俺の気分だよ」
「では潔(いさぎよ)く退かせてもらおうかの」
「今度はゆっくり茶でも飲みながら話でもしようぜ」
「そう出来るのが一番良いんじゃがな」
そう言うと仮面の女性の周りに木の葉が舞い、姿を消す。
戦いが終わると人が集まってきた、人払いの術は解除されたようだな。
刀を持っていると職質とかされそうなので腕輪にして装備してみた。
そして何もなかったかのようにその場を離れて帰宅した――

「ただいまー」
なんとか無事に家へと帰ってこれた。
「ご無事でしたか、ご主人様(マスター)」
「よゆーよゆー」
「何者だったのでしょうか」
「きっと陰術師だ」
「陰術師・・・東洋の魔術師ですか」
「ああ、きっと人避けの術でも使ったのだろう」

陰術って言うのは幻覚や人払い・金縛りなどの戦闘補助系の術を使う東洋の魔術だ。
それにやつは目標が俺ではないと言っていた、じゃあ誰を・・・
まぁ大体分かるけど・・・
「うにゅ～」
姉さんがいきなり階段から滑り落ちてきた。
「姉さんが何をしてたのか知ってるか？」
「肯定します、夕方に届いた封筒の中の書類を書かれていましたけど」
仕事の書類でも書いてたのか？
「姉さん、こんなところで寝てると風邪ひくよー？」
そうして謎を多く残しながらも夜は更けていった・・・・

つづく

夢のような出会い（中二病的に）

センター街での戦闘から一夜が明け、また静寂な朝がやってきた。

「朝だけは平和だな・・・朝だけは・・・」

大事なことなので二回言いました、ご了承ください。

「おはようございます、マスター」

そう言って二階から最高傑作の人造人間（ホムンクルス）ことコルリが下りてきた。

「ああ、おはよう・・・ってあの服屋でパジャマも買ってたんだな」

「肯定です・・・あの・・・似合ってますか・・？」

コルリは少し顔を赤くしながら俺にそう言った。

「ああ、スゲー似合ってるぞ、うん可愛い」

俺がそう答えると顔を耳まで赤くしてうつむいてしまった。

あれ・・・？　俺変なこと言ったか？

「マスターが・・・可愛いって・・・私なんかには・・・勿体無いお言葉・・・でも可愛いって・・・はうぅ・・・」

なんかブツブツとつぶやき始めた、そういうのはツ〇ッターでつぶやいてくれ。

「それはそうと今日は少し出かけるぞ、お前もついてこい」

「そそそそ、それは・・・デデデ、デートですかっ！？」

また顔を赤くしながら聞いてきた・・・落ち着け・・・・

「デートじゃねぇよ、とりあえず戦闘準備だけはしておけ」

「えっ？　あ、肯定ですマスター」

少し残念そうな顔をしながら返事をしてきた、何故？

「しかし、何処へ行くのですか？」

そう聞かれて俺は少し悩んだ末にこう言った。

「あのハイテンションでかなり手を焼く姉妹の家―

・・・浅瀬川家だよ」と―

戦闘準備を済ませて浅瀬川家へ向かった俺とコルリはある豪邸の前にいた。
「・・・・・・・え？」
「ここのようですね・・・・」
・・・・・・え？
これってなんかのドッキリ？

ピンポーン

俺は意を決して目の前の豪邸の家のインターホンを鳴らした。
井藤の情報によるとここだと聞いたが間違いじゃないだろうな・・・・
間違ってたら十字架に張り付けて校庭の真ん中でリアルキリスト張り付けの刑に処してやる。

ガチャ

そう井藤への罰を考えていると扉が開いた。
「どちら様ですか？」
そう言って玄関から出てきたのは見るからに育ちがいい女性。
「すいません間違えました」
浅瀬川姉妹とは全く違う風貌の人が出てきたので「あ、間違ったな」と思い、反射的に立ち去ろうとしたとき・・・
「どうしたのお母さん？　って師匠じゃないですかー」
・・・・・・・・え？
この人と小波が親子・・・・えぇーー？
「あら、小波ちゃんのお友達だったの？　ならどうぞ入ってくださ

い」
全く曇りのない笑顔でそう言われたので成す術もなく、そしていまいち納得もできないまま家に入って行った―

二人について行くとある部屋についた。
「どうぞ、そこに座っていてください」
そう言われて俺とコルリはテーブルの椅子に座った、どうやらここはリビングらしい・・・すげぇ広い・・・・そしてそこに涼子先輩がいた。
「おや？　これはこれは柳本君じゃありませんかー」
読んでいた雑誌から顔をあげてそう言ってきた。
「こんにちわです」
俺はそう簡単に挨拶をした。
「貴方が噂の柳本君なの？　あ、そう言えば自己紹介をしなかったわね、私は知っての通りこの子たちの母親の≪浅瀬川　紗那≫と申します」
「これは丁寧に・・・俺の名前は柳本謙斗と言います、こっちは俺じゅ・・親戚のコルリです」
この人本当にこの二人の母親か？　何がどうなったらこんな母親にあんな子供ができるんだ？
「で、何の用で家に来たんですか師匠？」
相変わらずのテンションで小波が俺にそう聞いてきた。
「ちょっと聞きたいことがあってな」
「え？　彼氏がいるかって？　そんなのいませんよ、たははー」
「そんなこと訊いてねぇし、訊く気もない」
冷やかにスルーをして俺は本題を訊く。
「単刀直入に言わせてもらうが・・・何故二人は人除けの術が聞かなかったんだ？」

「・・・・！？」
そういった瞬間空気が凍りついた。
「人除けの術は多分一般人を対象にした術式（根拠は俺・コルリ・香苗姉さんには効かなかったから）だ、なのに君たち姉妹は平然と俺たちのもとへと来れた、その理由は一つあんたら姉妹が普通の人ではないということ、今日はそれを聞きに来た」
俺がそう言うと二人とも黙り込んでしまう。
「あのね・・・実はね・・・？」
二人を見かねてか口を開く。
「いいよお母さん・・・私が言うから・・・あはは－ばれちったか－ごめんね師匠・・・私たちにも掟があってね？　一般人にもしばれたら・・・殺さなきゃならないの・・・だから許してね？」

パチン

小波が指パッチンした直後に風景がさっきまでリビングだったところが石でできたコロシアムへと変わった。
「瞬間移動魔法（テレポート）か・・・」
「マスターお気を付けください、何か・・・来ます」
コルリがそういった直後に地面に魔方陣が形成されて何かが飛び出した・・・
「これは・・・・まさか！？」
その姿を見た俺は目を見開き呆然とした・・・
なぜならそれは、翼を雄々しく羽ばたき、爪は鋼鉄も切り裂きそうなほど鋭く、そして俺に鋭く睨みつけている目、それは紛れもなく中二病になったものなら一度は憧れを持つ存在・・・
「・・・・竜（ドラゴン）」
俺はそうつぶやいた。
そして更に俺は思いっきりこう叫んだ。
「うおおおおおおおおおおお！！本物の竜（ドラゴン）だあああああ

あああああ！！」
今は恐怖よりも感動のほうが大きく凌駕していた。
だってドラゴンだぜ？　すげーじゃないか、これマジで本物だぜ本物！！
「すげぇ！！マジですげぇよ！！竜(ドラゴン)は竜でも翼竜(ワイバーン)じゃねぇか！！」
俺のテンションのケージが振り切れそうなくらい急上昇した。
そんな俺に小波が泣き顔で俺にこう言った。
「怖くないの・・・？　今からその竜(ドラゴン)に殺されちゃうんだよ・・・？」
何やら祭壇っぽい高台から小波と涼子先輩と浅瀬川夫人が俺たちを眺めていた。
「フハハハハハハハハゲホッ・・ゲホッ・・」
高笑い過ぎてむせた・・・ゲホッ・・・・・
「何で笑ってれるの・・・？」
「そりゃあ簡単だ、負ける気がしねぇからに決まってんだろ」
「無理ですよ！！師匠は強いですけども、仮面の女と戦って生きて帰ってきてましたけども、一般人は竜(ドラゴン)には勝てませんよ・・・」
ハハーン・・・こりゃ俺のこと勘違いしてるとみた。
「お前、俺のこと一般人だと思ってるだろ」
「・・・・え？」
昨日の戦闘の後に刀から錬金した腕輪に触れながら俺は錬金術の術文を詠唱する。

「我、万物の命の形を変えるもの、今我の望む形へと命を変えん」

詠唱が終わった俺の手は日本刀を握っていた。
「「「錬金術！？」」」
三人ともハモりながら驚くってスゲーな・・・・
「そう、俺は錬金術師、んでもってこっちは親戚と言ったが本当は錬金術師(アルケンティナ)の従者のコルリ」

「以後お見知りおきを・・・」
三人とも驚愕していた、もうポカーンってくらいに。
しかし下位の竜（ドラゴン）は知能が低いのか空気を読まずに突進してきた。
そこはもうちょっと我慢しろや。
「グォォォォォォォォォォォ！！！」
目測で軽く時速４０？くらいの速さでつっこんできた。
「小波早く送還魔法を！！」
「あわわわわー」
パニクりすぎだ・・・落ち着けや・・・
まぁそう考えている間も竜（ドラゴン）がせまってくるわけで・・・・
「グォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！」
「マスター、どういたしますか？」
「しょうがないから最終手段をとることにしよう・・・・」
俺はそういって日本刀を突き付けながら、その上殺気全開で竜（ドラゴン）を睨みつけこう言った。
「おい、でかトカゲお前・・・死にたいのか・・・？」
そうするとビクッとして速度を落とし俺の前へと歩いてきて頭を下げた。
「よし、いい子だ」
低級の怪物（モンスター）ほど相手が自分よりも強い者と分かると従う確率が高いのは常識だろ？
俺は竜（ドラゴン）の鼻を少しなでてやる、なかなか可愛いな。
「師匠すごい・・・・」
「眺めてないで早くこいつを送り返せ」
少し呆れた顔で小波に言った。
「あっ・・はい」
そういうと竜（ドラゴン）の足元に魔方陣が形成されて粒子となって消えていった━
━パチン

それが聞こえた時にはもうすでにリビングへと戻っていた。
「師匠、ほんっっっっとうにすいませんでしたっっっ！！」
土下座された、しかも全力で。
「今までの事を見る限り、浅瀬川家は魔術師の家系なのか」
「あははーばれちゃった？」
急にいつもの口調に変わった。
さっきの反省土下座の真剣さはどこへ行った・・・・
「まぁいいさ、過ちは誰でもすることだし、俺も正体を隠していたからな」
「師匠・・・？」
うっとりとした顔で俺を見んな・・・
「だがしかしだ」
「ふぇっ？」
まさかの逆接が来るとは思ってなかったらしく変な声をだした。
「俺たちを殺そうとしたことに変わりはないからな」
「・・・・・はい」
ちゃんと反省はしているようだな。
「罰として・・・・」
「罰として・・・？」
まさにゴクッとかいう擬音が聞こえてきそうな感じに小波が真剣な顔をしていた。
「俺にも魔法を教えてくれ」
「・・・え？」
まさにヨソウガイデースって感じだな。
「い・い・よ・な？」
「は、はい、わかりました！！」
ビシッと俺に敬礼してきた。
「あと、涼子先輩と紗那さんは反省文と一時間正座していてください」

地味に嫌がらせに適した二つを罰にしてみた、作文の内容が楽しみだなー

「ええーーーー！？」

「あららー」

「自分たちは部外者です的なオーラ出してたからその罰だ」

「そんなーーーー」

「仕方ないわよ涼子ちゃん」

そうしてこの騒動は無事（？）終了したのである。

つづく

夢のような出会い（中二病的に）（後書き）

お久しぶりーですね
やべぇ、小説の書き方忘れたっ・・・て感じになっていましたが無事書き終えることができました。
では今回はここら辺で、さよならノシ

誰もが一度は憧れるもの

竜(ドラゴン)との戦いの後、俺とコルリは浅瀬川家の地下部屋にいた。

右を見ても左を見ても本が積まれている。

「ここは魔法書の保管場所だよー、自由に見ちゃっていいよー」

そう小波に言われたので一番近くにあった本を手に取る。

・・・・・読めねぇ。

「なぁ、これ何語？」

「確か古代ギリシア語だったかなぁ？」

「読めるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

事前に小〇館シリーズで予習しとけばよかったぁぁぁぁ！！

「日本語訳版ならあるよ？」

「先にそれを言えっ！！」

小波から日本語訳版を受け取り読み始める。

「黄昏よりも暗き存在(もの)、血の色よりも紅き存在―」

ド〇グ・スレーーーーイブって、ダメだろこの呪文！！

「なんで富〇見ファ〇タジア原作のファンタジーの金字塔になった物語の魔法があるんだよっ！」

「でも、本当に撃てるんだよ？」

「町ひとつ吹っ飛んじまうわ！！」

こいつ竜〇斬(ド〇グ・スレ〇ブ)の威力知ってないな。

「でもどうしたら魔法が使えるんだ？」

「読むだけで使えるようになるよ？」

「え？」

「その後、練習して使いこなせるようになったら完成したってことになるんだよ～」

「えーと、つまり読み込みが終わったらゲームが出来る、みたいな？」

「うん、その通りだよ師匠」
・・・・錬金術と同じかよっ！！
「なら今から速読するから少し待ってろ」
ペラペラペラ・・・
ページをめくる音だけが響いている━

━「おし、全部読んだ」
時計を見るとあれから約2時間経っていた。
「お疲れ様です、ご主人様（マスター）」
「ん？　ああ、コルリか」
すぐそばにコルリが立っていた。
「この後はどうしますか？」
「もう帰るか・・あれ、小波は？」
「小波様ならそこで寝ていますが、起こしますか？」
「いやいい、起こさないように静かに上に戻るぞ」
「了解しました」
音をたてないように静かに上へと戻った・・・

「もういいの？」
階段を上がっていった先には紗那さんが立っていた。
「はい、今日はもう帰らせてもらいます」
「じゃあ、はいこれ」
手渡されたのは6枚の原稿用紙。
「私の書いた反省文よ、涼子ちゃんはまだ書いてるから明日渡せると思うわ」
「じゃあ、明日が楽しみですね」
俺とコルリは玄関へと行き、靴を履く。
「では、また来ますね」

「ふふっ、貴方なら大歓迎よ」
そんな言葉を交わして俺とコルリは家へと続く帰り道を歩いて行った。

つづく

誰もが一度は憧れるもの（後書き）

今回は短めですね。
次回は意外な人物の正体が！！

驚きの助っ人

浅瀬川家から帰るため、俺とコルリは小さな川のそばを歩いていた。

「なんだかお前が来てから不思議なことがよく起こるな」
「ご迷惑でしょうか・・・・」
「いや、むしろ大歓迎だ！」
まぁ、めんどくさくないのに限るがな。
すると、前方に人影が見えた・・・・あいつは・・・
「また会ったな」
「おや、あの時の錬金少年じゃないか」
前方にいたのは、あの時の妖狐の仮面をつけた女性。
今回も妖狐の仮面をつけている。
「コルリ下がってろ」
「わかりました、お気をつけて」
「おう」
コルリを背にして、歩きだしあの時のクナイで作った腕輪を錬金する。
「我、万物の命の形を変えるもの、今我の望む形と命を変えん」
もちろん、作り出したのは日本刀だ。
「さて始めようか」
「そうしようか、少年」
「いざ、尋常に」
「「勝負！！」」
命がけの真剣勝負なのに、俺と彼女は笑っていた―

―「はぁぁぁぁぁぁぁ！！」

鋭く縦に刀を振るうが彼女にはあたらない。
「ふっ！！」
彼女も負けじとクナイを投げるが、俺は余裕でかわしていく。
俺はこの戦いを楽しいと感じていた、多分彼女も同じなのだろう。
なぜなら彼女から殺気を全く感じない、まるでじゃれているかの様な感覚に陥(おちい)っていた。
「なんだかようやく宿敵(ライバル)を見つけたって感じだな」
「全くその通りだよ、君こそ私の宿敵(ライバル)だよ！！」
刀とクナイが交差し、火花を上げる。
「なら隠し事は一切なしだ！！」
そう叫ぶと俺は彼女と距離を取り、呪文を唱えた。

「我が手に宿るは小さき太陽━」
「火炎玉(ファイヤーボール)！！」
手のひらに形成されたバレーボールくらいの火の玉を勢いよく投げる。
周りの家を考慮して周りには防御魔法の結界(バリア)を少し強めにかけている。
「魔法か、面白い！！」
彼女も負けじと懐から札(ふだ)を取り出し叫んだ。

「我が契約せし式神よ、いまその力を解き放て・・・神獣≪八咫烏(やたがらす)≫大旋風！！」
俺の火の玉は八咫烏の強風によって消されてしまった。
「式神、しかも神獣の力を使うのか！！」
相手もそんな隠し玉があるなんて、面白い！！
そしてまた刀とクナイが交差する。
しかし、そんな楽しい時間も終わりが近づいてくる。
いきなり強烈な殺気が背後から押し寄せてきた。

振り返ると巫女服の少女が電灯の上に立っていた。
「いつまで遊んでいるのですか？」
そう少女は言うと袖から札を取り出した。
あれはさっきの札と同じ！！
「我が契約せし式神よ、いまその炎を解き放て、炎獣≪狐火(きつねび)≫燈火(ともしび)」
札から八つの燈火が現れ、それぞれが狐の形に変化し襲いかかってきた。
まずい、このままじゃ二人ともお陀仏だ。
「くそっ、やるっきゃねぇか！！」
俺はそう言い、仮面の女性を突き飛ばした。
「なにっ！？」
「すまないが対決はまた今度だ」
また今度とは言ったが・・・これは死んだな。
まったく、面白くなってきたのに、もうおしまいか・・・・つまらんな。
「まったく、面白くなってきたのに、もうおしまいか？・・・・つまらんな」
その瞬間目の前の狐の形をした燈火が一瞬にして消えた。
俺が心の中で思ってたことそのものが聞こえてきた、しかもこの声を俺は何度も聞いたことがある。
「それに真剣勝負をしているのに横槍(よこやり)を入れるなんて、非常識じゃないか？」
その声の主の方を見ると浅い川の中央で指を銃のように構えた―正也が立っていた。

「よぉ、謙斗」
「よぉ、謙斗・・・じゃねぇ！！」
「じゃあ、こんばんわ？」
「そういうことじゃねぇんだよ！！」
「え、もう日が暮れかけてるけどちがうのか？」
「ちげーよっ！！」
なんか漫才始まっちゃったー！？
すっげーシリアス展開だったのにどうしてこうなった！？
「だから！！あの力はなんなんだよ！！」
「ん？ただの妖の力だ」
「お前、妖怪だったのか！？」
「え、あ、言ってなかったっけ？」
「聞いとらんわ！！」
「まぁ、妖怪とは少し違うんだけどな」
「あー、もういいや面倒くさい」
俺は正也の方を向きながら仮面の女性へと歩いていき、手を差し伸べるため顔を彼女に向け・・・

「・・・・・え？」

なんとそこに居たのは――明道先輩。

「なんで・・・先輩が・・・！？」
「・・・・・ごめんなさい」
今起こったことをありのままに話すぜ・・・俺の敵である妖狐の仮面を着けた女性は実は同じ高校の明道先輩だったんだ、俺にも今の状況はよく分からねぇぜ。

「ばれてしまいましたか」

少女は嘆息しながらそう言う。
「申し訳ありません」
「仕方ありません、今日はもう退きましょう・・・」
そう言って、去っていく。
「ちょ、まっ！！」
クソっ逃げられた・・・
「申し訳ありません、従者にも係(かか)わらずご主人(マスター)様のお命を危険に晒してしまいました・・・・」
「気にするな、問題は一つだ」
「そうですね」
「ちょっと待て、俺を仲間外れにするな」
「あー、すまん素で忘れてた」
「うぉーい！？」
「冗談だって」
マジで忘れていたがそれは口にはしない、うん俺大人。
「あー、こいつはコルリ、俺の従者だ」
「以後、お見知りおきを・・」
「従者って・・・マジで？」
「本気と書いてマジだ」
ネタが古いな、まぁメジャーだから大丈夫だとおもうが。
「で、お前は何者なんだ？」
「俺は蛟(みずち)の血を引くものだ」
「蛟って水霊だよな、たしか」
「まぁ、各地にいろいろな説があるが、まぁそんなとこだ」
錬金術、魔法、陰術、式神、妖術・・・中二病の血が滾ってきた！！
「コイツハオモシロクナッテキター！！！」
「いきなりなんだっ！？」
「ふはははははは！！俺の中にたぎる中二病の血が騒ぐぜぇぇぇぇ

え！！」
「落ち着け、近所迷惑だ」
「おおぅ・・すまんすまん」
燃えていたところに水がかけられました、流石は蛟と言ったところか。
「うまくないぞ」
「心読まれたっ！？」
そう雑談しながら俺たちは家へと帰って行った。

ちなみに、明道先輩が投げたクナイはすべて俺が一つにして腕輪にしました。

つづく

襲撃は計画的に！

日曜日の仮面の女性の正体を明道先輩だと知ってから一夜が経ち、現在学校にて熟考なう。
浅瀬川先輩に聞いたところ今日は明道先輩は学校へ来てないらしい。

「はぁぁぁぁぁーーーーー・・・・・・・」
俺はかなり深いため息をする。
「大丈夫か？」
正也が心配してくれる、こいつは俺と明道先輩との戦いを見てたから気を使ってくれるのだろう。
「大丈夫・・・に見えるか？」
「見えねぇな・・・」
俺は机に突っ伏してうなだれる。
「あーもうめんどくせー！！」
俺は急に立ち上がり拳を握る。
「急にどうした！？」
「お前、今日の放課後空いてるか！？」
「空いてるけど・・・それがどうかしたか？」
「明道先輩の家に押しかけて俺を狙う理由を聞き出すぞ」
「マジでか、めんどくせーな」
その返答は予想の範囲内だな、対処法はすでに考えている。
「俺の火炎玉（ファイヤーボール）を喰らわして水蒸気にするぞ」
「マジですいませんでした」
俺の脅迫（きょうはく）に屈した正也は瞬時に土下座をする。
蛟（みずち）の身体は基本的に水で作られてらしいので蒸発とか凍結とかするらしい（本人談）
「あとは浅瀬川姉妹だな」

「なんであの二人も連れて行くんだ？」
「あいつら魔法使いの一族なんだ」
「・・・・・・え？」
「いろいろと・・・まぁ危うく殺されかけたけど、今は仲間だ」
「いろいろって・・・端折りすぎじゃねぇか？」
「本当にいろいろあったんだよ」
竜（ドラゴン）と闘ったり・・・反省文書かせたり・・・
「役者がそろってきたな」
あとは・・・コルリと香苗姉さんってとこだな。
「仕上げはお姫様（明道先輩）を王子様（お前）が助けに行けばめでたしめでたしってとこか」
「その前に姫（巫女服の少女）を守る竜と戦わなきゃなんないだろ」
そうはたから聞いたら何言っているのか分からないだろうな。
「おーい、ヤナギー！！」
そう叫んでやってきたのは≪稀代の変態≫こと井藤だ。
「どうかしたか？」
「ビックニュースだ！！　このクラスに転校生が来るらしい」
「へーそうなのか」
特に驚かない、だって驚く理由もないしな。
「謎の美少女らしいぞ！！」
「謎の美少女？」
正也が井藤にそう聞く。
「どこから転校してきたのかも分からないらしい」
「謎の美少女なぁ・・・」
そう言った瞬間に俺の脳に三つのワードがよぎる。
『土曜日に早苗姉さんが書いていた書類』
『転校してくる美少女』
『コルリ』

・・・・・・これ絶対最後のやつが答えだよなぁ！！
なんか朝スゲーにこにこしてたしなぁ！！
「浅瀬川姉妹以上に頭痛の種になりそうだな・・・」
額に手を当てて嘆息する、そんな俺に正也は「ご愁傷様」と告げて自分の席へと戻って行った。
時計を見るともうすぐＨＲが始まる時間だった、もうこんな時間か・・・

ガララッ

「早く座れーＨＲ始めるぞー」
俺のクラスの担任が入ってくる、ここまではいつも通り・・・重要なのは次だ・・・・
「えーと、今日はー転校生を紹介する、入ってこい」
「「「「おおー！！」」」」
馬鹿男子達（俺と正也を除く）が歓声を上げていた（特に井藤は大声で）
・・・・入ってきたのは・・・予想通り俺の従者・・・・
「自己紹介を頼む」
「肯定します、私の名はコルリ・Ａ・ホミュラーです、現在は穂見浦宅でお世話になっております、どうぞみなさんよろしくお願いします」
「穂見浦って今柳本が住んでいる親戚の所じゃ・・・」
ちっ、今それを言うなよぉぉぉぉぉ！！
男子共（正也と井藤を除く）が憎悪の視線を浴びせてくる、はっきり言ってうぜぇ。
井藤が憎悪の視線をこっちに向けてこないのは美少女を見れただけで幸せだからだそうだ。
「じゃあ、柳本の隣の席に行ってくれ」

「肯定します」
そう言って俺の隣の席に座る。
「なんでお前がこんな所にいるんだ？」
「香苗様が従者なら片時も離れないほうがいいと言われまして」
「まぁ従者としては妥当だな、今回はお咎(とが)めはなしだ」
「分かりました」
「あと、余計なことは話すんじゃねぇぞ」
「重々承知しております」
「なら良し」
そうして一時間目が始まり・・・・いろいろあって現在昼休み。
恒例のメロンパン争奪戦で部長（笑）を打ちのめし、屋上で昼食なう。
しかし今回は京子にはメロンパンを渡す代わりに席を外してもらっている。
それは明道先輩の家へ押しかけるということは危険が伴(ともな)うため今回のことには巻き込めないからだ、そのかわり浅瀬川姉妹とコルリがいる。
あと井藤は『こいつならきっと大丈夫だな』ってことで情報提供のためここにいる。

「結論から言うと誰も明道先輩の家には行ったことがないし知らないと・・」
もっとも仲がよさそうな浅瀬川先輩に聞いても家に行ったことがないどころか家すら知らないらしい。
「だがしかし、こういう時のための井藤だ」
「確かに・・・こいつは校内一美少女達のの情報を持っているからな」
こいつの女子に対する執着心は変態レベルを超えているといっても過言ではない（美少女に限る）。

「明道先輩の家は成尾(なるお)町一でかい家だ」
「どのくらいでかいんだ？」
「成尾町の９割を明道家の家の敷地が占めている」
成尾町と言えばここらへんじゃあ一番でかい町じゃねぇか！！
「もしかして明道家ってあの明道か！！」
古来、もとは陰術師の家系でその中に武術派の家系が入ったため近接戦闘に特化した家系になったらしい、最近じゃオリンピックの武術に関係する競技には必ず居る名前だ。
それに昔からここらじゃ有名な武家でかなりの金持ちのはず・・・てか俺もなんでいままで気づかなかったな。
「じゃあなんで富豪派じゃないんだ？」
この学校は三つの派閥に分かれており『体育会派』『庶民派』『富豪派』と別れていて、なおかつ校舎も各派閥により分かれているため三つある。
体育会派はが学費が最も安く運動にを重視した教育をしているらしい。
庶民派は学費も教科も普通の高校レベル。
富豪派はその名の通り学費が高い代わりにかなり設備がよくて、教科の方も帝王学などを教えているらしい。
「なんか自分からこっちに来たらしいよ？」
「教室で聞いたら家系は関係ないとか言ってたね」
「でもそれと俺を狙う事は関係ない・・・やはりアトランティス絡みの俺達か」
「アトランティス？」
と井藤が聞いてきた、こいつのことすっかり忘れてたな。
「あーお前まだいたのかもう帰っていいぞ」
「じゃあ美少女をストーキングしてくるわ」
「警察には気をつけろよー」
いきいきしてたなー流石は変態だ。
「でも押しかけるのにしてもそれなりの戦力がいるな・・」

「俺に任せろ」
そう言ったのは正也だった。
「実は俺ここらへんの妖怪を仕切ってんだ、だからそいつらを連れてくるよ」
「それは心強いな」
百鬼夜行を生で見れるのか、楽しみだな。
「じゃあ今日の放課後、各々は自分の武器を持って成尾町の隣の東成尾町の植田公園に集合だ」
「「「おー！！」」」
そういった瞬間昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。
俺たちは解散して自分の教室へと戻って行く。
「今日の放課後は楽しくなりそうだな」
「背中は頼んだぜ正也」
「おう、任せろ」
ハイタッチの代わりに俺と正也は拳をぶつけ合った。

つづく

襲撃は計画的に！（後書き）

最近設定がおかしくなりつつある・・・・

明道先輩略奪作戦（仮）

学校が終わってからすぐに俺とコルリは香苗姉さんを引き連れて植田公園へと向かった。
するともう全員集まっていた。

「遅いぞ謙斗」
「お前らがはやすぎんだよ」
正也の後ろには3人の人影がある。
「こいつらはここら一帯の妖怪たちの代表者たちだ」
確かによく見ると人の形をしているものの尻尾があったり、角があったり・・・・・
「私は獣型の妖怪の代表≪斑（まだら）≫と申します、見ての通り猫の妖怪≪二股≫です」
そう言って二股の尻尾を見せてくる、頭のネコミミだけで十分なんだけどな。
「次に儂じゃな、儂は人型の妖怪の代表≪鬼気（きき）≫と申す、見ての通り鬼の一族じゃな」
額からは二本の角が生えている、うむ立派だ。
「次はあたいだね、あたいは付喪神の代表≪古刀（ことう）≫だ、古き日本刀の付喪神だよ」
見たところ普通の大和撫子って感じだ、本当に付喪神なのか？
「俺は錬金術師の柳本謙斗だ、こっちは俺の従者のコルリでこっちが俺の従姉の香苗姉さん」
「以後お見知りおきを・・・」
「よろしく～」
「私は西洋魔術師の浅瀬川涼子だよ、こっちは私の妹の小波だよ～」
「よろしくね～」
浅瀬川姉妹が絡むとどうも緊張感に欠けるなぁー

ちなみに俺と香苗姉さんと正也は私服、コルリはアトランティスの服、浅瀬川姉妹はローブだ。
やっぱ魔女ってローブ着るんだな・・・
「妖怪たちの準備は大丈夫か？」
「いえ、実はまだ少しかかりそうです」
「そうか、なら妖怪たちは門付近で待機していろ、準備が完了次第俺に合図しろ」
「分かりました」
「承知じゃ」
「了解だよ」
各代表たちから返事が聞こえた。
「さぁて、ミッションスタートだ！！」
俺はパチンと指を鳴らした。

俺たちは今明道家宅のデカい門の前にいる・・・デカいなマジで・・・梁山泊って看板がありそうな勢いだな。

ピーンポーン

とりあえず俺はインターフォンを鳴らす、まずは焦らず話し合いからだ。
「はい、なんでしょうか？」
そう聞こえてきたのは女性の声、明道先輩の母親か？
「あの明道先輩はいますか？」
「貴方はあの子とはどういう関係で？」
「同じ高校の後輩です、他の者もいますけど入ってもよろしいですか？」
「・・・・ダメです帰って下さい」
「それは何故ですか？」

「ダメなものはダメなんです！！」
その反応を待っていた！！
「じゃあ力ずくで入らせてもらいますね」
俺はそういうとみんなにアイコンタクトを交わし、門の前に立ち拳を構える。
「はぁぁぁぁぁぁ！！」
一気に拳で門を殴ると軽々と開いた。
「大体２００？ってとこか、見た目よりも軽いな」
「流石、最強の庶民の称号を持つだけはあるな」
「あの門を軽々と・・・すごいね～」
「流石は師匠です！！」
「さっさと行くぞ」
俺たちが中に入ると、目の前に広がるのは石畳の道に松や池。
「ここは寺かっ！！！」
おっと・・・つい叫んでしまった・・・・
「侵入者だ、捕らえよ！！」
「おっと見つかったか、各自作戦通りにしろよ！」
「「「ＯＫ！！」」」
そう言って見事に敵の間をかいくぐり二人一組になり散っていく。
「コルリ、背中は任せたぞ」
「肯定です、ご主人様（マスター）」
そういうと俺は即座に腕輪を錬金し鉄の棒を作り出す。
コルリはどこからかトンファーを出していた。
「お前それどこから出したんだ・・・」
「香苗様からもらったものです」
「なんで姉さんがそんなものを・・・」
このことはあとで姉さんに直接聞くか・・・・
そう呆れていると俺の視界の中にちらっと火の玉が入る。
「やっと来たか」
俺がそう言うと背後の門から足音がする。

「今宵は新月か・・・」
既に暗くなっていた空を見上げ俺はそうつぶやく。
後ろからは代表三人（？）組を先頭に行列が門から敷地内へと入ってくる。
「逢魔ヶ時の暗き道、その道は通ってはいけません」
「何故ならば、そこをまかり通るは我ら妖怪じゃ」
「それを見たものは怯え、そしてこう言うだろうねぇ」
代表三人組が何やらセリフを言っている、今どきの妖怪はそんなことを言うのが流行なのか？
「その名も百鬼夜行・・・ってね」
まぁ最後のセリフは俺が盗らせてもらったがなっ！！
「あ・・・・・・」
「全く、無礼な童（わらべ）じゃのぅ」
「旦那ぁ、最後のセリフを盗るんじゃねぇよ」
多分最後のセリフは三人一緒に言うつもりだったんだろうな。
「すまんなその代りにこの場はお前らに任せる、あと人を殺したり喰うんじゃねぇぞ」
そう忠告すると俺とコルリは敵の間をくぐり抜け、最も大きい本堂らしき建物へと入る。
「井藤の情報によると、どこかに地下牢への入り口があるらしい」
てかどこから仕入れたんだよ、この情報・・・
「透視が使えたらいいんだけどな・・・」
「見つけましたご主人様（マスター）」
「おぉぅ！？」
こいつどうやって見つけたんだよ・・・今回は手間が省けて助かったけどな。
どうやら床板に隠されていたらしいが、コルリが見事にトンファーで粉砕している。
「行くぞ」
「肯定です」

石でできた階段を全力で下りていく。
すると広いところに出た、そこの中央に立っているのは姫(巫女服の)を守る竜(少女)、その後ろにはお姫様(明道先輩)が腕に腕輪を着けられた状態で寝ていた。
「やっと来ましたね、遅いですよ」
「そんなに待ち遠しかったのなら俺と直接対決をしに来ればよかったのにな」
「家の命令でそれは出来なかったのです」
「命令か・・・お前は操り人形か何かなのか？」
「はい、私は忠実な人形・・・命令により貴方を抹殺します」
「やれるものならやってみな」
俺は持っていた鉄の棒を日本刀へと錬金する、対する彼女は両袖から刀を抜く。
「ほぅ、君は二刀流なのか」
「一刀流のあなたには負けませんよ・・・」
「剣が二つになったからと言って強さが倍になるわけじゃねぇぞ」
会話を交わしているがどちらも目線を逸らさない。
「コルリ、そこで見ておけ、手は出すなよ」
「大した自信ですね」
「自信なんかじゃない、俺は正々堂々勝負がしたいだけだ」
「戦いを好むのですか・・・低俗な」
「低俗だろうがなんだろうが俺は救わないとならないものがあるからな」
そう俺には目の前に救うべき対象がいる・・・明道先輩・・・・・
それともう一人。
「そう余裕ぶっていられるのもこの技を受けるまで・・・・」
少女はそう言いながら右手に持っていた刀を逆手に持ち替える。
何か・・・くるっ！！
「桜鳳流剣術奥義≪五月雨≫！！」
彼女はその場で二刀の剣を振るだけに見えただが俺の頬を何かがかすり、そこから血が流れる。

見えない風の斬撃か・・・・・
「なかなか厄介な技を使うな」
「貴方はこの技を避けることはできない」
「だが、未然に防ぐことはできる」
俺は踏み込み刀背(みね)であの攻撃を出させないように攻撃していく。
「刀背で戦うなんてふざけているのですか？」
「今はまじめだぜ？」
刀同士が交差しあい火花が散る。
「くっ・・・桜鳳流剣術奥━」
「そぉら、すきありぃ！！」
「しまっ・・・！？」
俺は剣を二本とも弾き飛ばし剣先を少女の喉元へと向ける。
「俺の勝ちだな」
剣の達人は技を出すときに隙が生じる、まさかこれが本当だったとはな。
「舌を噛むんじゃないぞ」
そう言うと少女は苦い顔をした。
「敗者の命は勝者が握るものだ」
そう言うと俺は刀を腕輪に戻し、明道先輩へと近づき鍵を眺める。
どうやって外そうかこれ・・・・
「何故私を生かしておく！！」
「じゃあ・・・君に問おう、君は何かやりたいことはあるか？」
俺は明道先輩の手首に着けられている腕輪を錬金術で作ったピッキングツールを使って鍵を外すのを試みる。
「何を言って・・・・」
「何かやりたいこと・・・たとえば将来の夢とかさ・・・そういうのがあるなら生かす、やりたいことが何もないならここで舌でも噛んで死んでくれてもいい・・・・おっ外れた」
「私のような人形に同情しているのか・・・？」
「いや違う同情じゃない、それに君は人形じゃなくて人間だ、やり

たいことの一つや二つあるだろう」
「私を人だと認めてくれるのか・・・？」
「ああ、君は紛れもない人だ俺が保証する」
俺がそう言った瞬間、少女は急に涙目になる・・・俺はそれを見て少女に顔を向けこうささやいた。
「それにこんなに可愛い子が人形なわけないじゃないか」
か弱く光った目から一筋の涙がこぼれ、ダムが決壊したかのように涙がボロボロとこぼれる。
少女はその場で泣き崩れ、か細い声でこう言った。
「私・・・私のやりたいことは・・・洋服とか来たり・・・お菓子食べたり・・・普通の女の子みたいなことが・・・したい・・・です・・」
俺はそれを聞くと少女の頭をなでながらこうささやく。
「なら俺がお前の望みを叶えてやるよ」
「うんっ・・・・」
「それでよし、コルリは明道先輩を頼む」
「肯定です、ご主人様（マスター）」
「立てるか？」
少女は首を横に振る。
「なら・・・よっと」
「なに・・・してるんですか・・・」
俺が少女にしたのは・・・ただのお姫さん抱っこですが何か？
「しっかり掴まってろよ！！」
俺は階段を駆け上がり、上へと出た瞬間着物を着た女将のような人と鉢合わせた。
多分この人が明道先輩の母親・・・・
「何故、貴方達は俺たちを狙う！！」
俺は殺気を含んだ視線で睨みつける。
「これは神の意思なのです・・・・」
「桜鳳家の神託か・・・・」

「何故それを！？」
「この子は桜鳳家の子だろ？　それに明道家と桜鳳家は元々は同じ血筋だしな」
桜鳳家というのは神社を代々守る家系で、除霊・妖退治そして神託を行うと聞いている。
この情報も井藤からの情報だ、流石は井藤だ美少女の情報に関しては血縁まで把握しているとは・・・
「今回の裏は桜鳳家か・・・」
「くっ・・・・」
「ならもうここに用はない、それと少し娘さんは預からせてもらう」
そう言うと本堂から飛び出し、今だ乱戦中の妖怪代表者三人に声をかける。
「任務は完了だ、退くぞ！！」
「撤退信号を撃てー！！」
古刀がそう叫ぶと空に火の玉が上がる。
「撤退だーー！！」
妖怪たちは潮が引くように去っていく、それに紛れて俺達も去っていく。
そんな中、俺は怒りの感情がふつふつと湧いてきていたー

明道先輩奪取作戦が終わり、俺達は穂見浦宅にいた。
「明道様と桜鳳家の少女は安静に寝ています」
「そうか、謙斗あとはどうするんだ？」
「なんでそんなこと聞くんだ正也？」
「なんかお前今怒ってるだろ」
「やっぱお前の前じゃ嘘は通じないか」
俺は苦笑するが正也以外は分かっていないらしい、だがそっちの方が都合がいい。

「次は桜鳳家に行こうと思う」
「桜鳳家は確か神社の守護の家系だよな・・・・なら妖怪たちを連れて行くことは出来ないな・・・」
「いや、次は俺一人で行く」
「私はついて行きます、ご主人様（マスター）」
そう言ってくれるのは頼もしいんだがな・・・・・・
「駄目だ、お前もここで待っていろ」
「でも、しかしっ！！」
「これは命令だ」
「・・・・・」
「桜鳳家には個人的に言いたいことがあるんでな」
もちろんあの少女のことについてだ、ついでに保護者の顔を拝みに行くか。
俺はおもむろにケータイを取出し奴に電話をする。
「あーもしもし？　俺だ」
『おぉ、ヤナギーか』
出てきたのは≪今世紀最凶の変態≫こと井藤。
「桜鳳家の神社の場所と建物の構図の情報はあるか？」
『桜鳳家の情報か、ちょっと待っててくれ』
少し時間がたち、井藤から返答が返ってくる。
『ああ、あるぞ今からそっちに送るわ』
そう井藤は言うと電話を切った。
そして一通のメールが来る。
中身を見てみると神社の地図と建物の構図のデータが添えられていた。
「結構近いんだな・・・・」
地図で最寄の駅は西ノ宮駅、大体この家の最寄りの駅から電車に乗って２０分ってとこだ。
神社の名前は・・・・桜鳳神社・・・・そのまんまかよっ！！
「じゃあ行ってくる」

「ちょっと待て謙斗」
「なんだ？」
「これをお前にやるよ」
そう言って正也から刀を渡される。
少し抜くと一筋の白銀の光が反射している、この刀の切れ味は見ればわかるほど見事なものだ。
「恩にきる」
そう告げると俺は玄関から桜鳳神社へと向かうため駅へと向かった。

つづく

明道先輩略奪作戦（仮）（後書き）

ども、心眼です
なんだかストーリーがごちゃごちゃしてきましたねｗｗｗ
しかも新しい人物（？）が出てきましたし。
斑はもとから出る予定があったのですが他二人（？）はこの話を考えているときに出てきましたｗｗｗ
よくあるんですよね飛び入り参加がｗｗｗｗｗ
では次回会いましょー

ここって神社だよな？

家から約２０分かけ、桜鳳神社の前へと着いた。

「頼もぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

そう叫んで思いっきり門の扉を蹴りで開ける。

門を開けた先にはざっと５０人くらいの武器を持った巫女さんたちがいた。

「貴方が錬金術師のお方ですね？」

そう聞いてきたのは巫女さんたちのリーダーっぽい巫女さん。

「それを聞いてどうする？」

「貴方を殺すまでです！！」

斬りかかってきた。

何で巫女さんなのに殺すのに抵抗がないんだよ、しかも刀やら薙刀(なた)やら武器が人数分あるって武装神社かここは。

「全く・・・急に斬りかかって来るなんて無礼だな」

まぁ斬りかかってくる刃はすべて避けてますがね。

でも反撃する暇も無いし、どうするか・・・

「意気込んでた割にはピンチっぽいな」

「命令無視の罰はあとで受けます」

「私の従弟を苛める人たちは許さないわよぉ」

「本物の巫女さんだぁ～」

「でも武器をもってるよお姉ちゃん」

「迷惑をかけちゃったねぇ柳本君」

「私を生かしてくれた御恩、ここで返します」

門の方から聞きなれた声と最近になって聞いた声が聞こえてくる。

まったく・・・人の言うことを聞かない奴らだな。

「明道先輩とそこのちびっこの傷は大丈夫なのか？」

「私の名前は≪白羽(しらは)≫です、ちびっこって言わないでください！！」

そう言われてもお前今まで名乗ってなかったし。
「傷と言われましても、ご主人様（マスター）は刀背で戦っていましたので外傷は無いと思われますが？」
「俺の従者なのに分かって無いとはな・・・」
俺は巫女さんたちの刃をかいくぐり、白羽のもとへと行くと白羽の袴の袖をめくり上げる。
「！？」
「やっぱりな・・・」
白羽のか弱そうな腕には無数の痣や傷があった、一応最低限の治療はされている様だが・・・あまりにも酷い。
「いつから気づいていたのですか？」
「明道先輩の家でお前と戦った時だ、お前は≪五月雨≫を連発すれば俺を倒すことが出来たが、お前はしなかった・・・いや出来なかったんだろ？」
あの攻撃法は素早く刀を振ることにより風の斬撃を繰り出す、だが腕を素早く動かそうとすると傷が痛んで戦闘どころじゃ無くなるくらい痛いだろう、それでも俺との戦いで諸刃（もろはつるぎ）の剣でもある五月雨を使ってでも俺に勝とうとしたのは武士の心か・・・それとも違う理由か・・・
「多分明道先輩にも同じようにあると思うが・・・」
俺がそう言うと明道先輩は自分の服の裾を強く握る。
「今は急いでこの騒動の元凶の馬鹿を叩き潰さなければならないから今は戦うことを許可するが、無茶はするなよ？」
そう二人に忠告した俺は巫女さんたちのもとへと戻ろうとするが白羽がそれを遮（さえぎ）る。
「私にお任せください」
そう言うと白羽は巫女さんたちのもとへと向かっていく。
「お前たち、聞け！！　この人に手を出してはいけない！！」
「お嬢様！？」
そういや白羽はこの神社の当主の娘だったな、すっかり忘れてた。

「なぜその錬金術師の味方をするのですか！？」
「この方は私を救ってくれた御方だ！！」
説明をしたいところだが・・・今はそんな時間は無いから後で白羽に聞いてくれるとありがたい。
「まぁ、そう言うことだから通してもらうよ」
そのまま巫女さんたちの隣を通ろうと・・・まずは刀を下ろしてくれないかな？
「お嬢様はその男に騙されているのです！！」
なんでそうなるんだ、なんかもう面倒くさい・・・・
「お前らちょっと目をつぶってろ」
俺は正也たちにそういうと腕輪からリボンっぽい形状の金属を切り離す。
「今からは理科のお勉強だ！！」
そう叫ぶとリボン状の金属を巫女さんたちの方に放り投げる。
「我が手に宿るは小さき太陽！！」
それに火炎玉をぶつける。
すると金属は火炎玉に当たった瞬間、目が潰れそうなほどまぶしい光を発光しながら燃えていく。
「これはっ！？」
「マグネシウムに火をつけると発光しながら酸化マグネシウムになるんだぜ？」
その場しのぎの手作り閃光玉ってところだな。
「走れっ！！」
巫女さんたちは目が潰れてその場でで呻いている。
俺たちはそれを避けながら本殿へと向かった。
その道の中央に一人の男が立っていた。
「我こそは桜鳳四天王の一人、春雅（しゅんが）なり！！　錬金術師よここで勝負しー」
「邪魔だぁぁぁぁぁぁぁのけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ガスッ

そいつは俺のラリアットを喰らい思いっきり転んで石畳に頭をぶつけ、のびてしまった。

少し走るとまた道の中央に一人の女の人がいた。

「奴は四天王の中でも一番の小者！！　私は四天王の一人、夏凛（かりん）、私と勝ー」

ガスッ

今度は無言で飛び膝蹴りをみぞおちにかます。

「ぐえっ・・・」

夏凛と名乗った女性はうずくまって動かなくなった。

そしてまた少し走ると男の人が。

「奴は四天王の中でも二番目の小者！！　俺は秋暫（しゅうざん）ー」

ドスッ

俺が思い切りタックルを当てると茂みの方に飛んで行ってしまった。

そしてまたまた少し走ると女の人が。

「奴は四天王ー」

メリッ

名前を言う前に顔面にドロップキックをかますとその場に倒れた。

「もうちょっとポケ〇ンみたいに初見じゃキツイくらいの強さのやつはいないのか！！」

俺はちょっと怒り気味にそう走りながら言う、だってあいつら四

天王のくせに弱すぎだろ！！
そして気が付くと本殿の前にいたので、走っている勢いのまま本殿の扉も足で蹴って開ける。
本殿の中央には袴を着た４０代くらいの男性がいた。
「遅かったな、若き錬金術師よ」
「お父様！？」
こいつが桜鳳家の現当主でこいつの親父か案外普通だ━

ガキィン！！

と思った俺がバカだったんだな。
「で、この神社じゃ斬りかかるのが礼儀なのか？」
一瞬で間合いを詰めて斬りかかってきた、俺はそれを正也から貰った刀を右手で持ち、受け止める。
「私にも見えなかったよぉ」
明道先輩も驚いていた、この人仮面着けていた時と性格と喋り方違うよな・・・条件付き二重人格か？
そんなことよりこの状況をどうにかしないとやばい、右腕がジンジンしてきた。
俺は刀を両手に持ち直し、そのまま弾き返す。
「こんな重い斬撃は初めてだ・・・・」
いまだに右腕がジンジンと痛む。
相手は刀を構え直し俺をにらみつける、対する俺も刀を両手で構える。
「待ってくださいお父様！！」
白羽が俺をかばうように手を広げながら前に立つ。
「そこを退きなさい白羽」
「しかし、今回の神託は何かの間違いだと思います、刀をお収めください！！」
「人形ごときが私に意見を言うな！！」

プチッ

白羽の父親のその言葉に俺の中の大事な何かが切れた音がした。
「ごちゃごちゃと・・・・うるせぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」」

ドゴォォォォォォッ！！

俺の閃光のごとき飛び蹴りが白羽の父親の顔を蹴り飛ばす。
そのまま壁へと激突してその場に崩れていく。
「お父様！？」
「白羽はお前の人形じゃなくて子供だろうが！！」
俺は無防備な白羽の父親を何度も何度も踏みつける。
「落ち着いてください！！」
「！！」
はっ！！
気が付くと目の前には虫の息の白羽の父親が。
「あーすまん手加減できなかった」
苦笑いしながら白羽にそう言う・・・
なんかイラッてしたからついカッとなって本気でやった、後悔はしてないです、ハイ。
「明道先輩と姉さんはこの人の手当てを頼む、白羽は神の居る場所へ案内を頼む」
「すげーアバウトだな」
瞬時に正也からツッコミが飛んでくる。
仕方ないだろ、神社のことなんてよく知らないし。
「心当たりはありますけど、神を見ることが出来るのは神主だけです」
「こっちにも一応神がいるから大丈夫だろ」
そう言って指をさした先にいるのはもちろん正也。

蛟は水神とも言われているからな、大丈夫だろう。
「それとコルリにはやってもらいたいことがあるんだが」
そういうと俺はコルリに耳打ちをする、おっと内容はまだ秘密だぜ？
耳打ちを終えると、俺と正也、浅瀬川姉妹は白羽に案内され本殿の奥にあると言う神がいる場所へと向かった。

つづく

神様のさばき方（チェーンソー編）

神の居るらしい場所は本堂の裏の山にある≪神寝殿(しんしんでん)≫とか言う変な名前の建物らしい、そこへ向かうため俺たちは今とてつもなく長い階段を上っている。

「そう言えば、なんで俺とコルリがお前たちに狙われるんだ？」
明道家襲撃時に気になり始めた事だ、なんであの時まで気にしなかったんだろ・・・
「あーそれ俺も気になるわ」
「私も気になるな～」
「私も気になるよ～」
正也と浅瀬川姉妹も気になっているようだ。
「それはですね」
ゴクリと生唾を飲み込み白羽は語りだす。
「普通は年の始め、要するに元旦に神託は告げられるんですが、一昨日父が日課の神寝殿の掃除をしていると珍しく神託が告げられたんですよ」
神託ってのは正月に引くおみくじ的なもんなのかよって言うツッコミは心の中で押しとどめておこう。
「その内容が現在起こっている桜鳳家の危機を打破する神託なのです」
「桜鳳家の危機？」
「今桜鳳家は財政危機に見舞われているのです」
「で、その原因が俺とコルリにあると」
「正確には錬金術師ですけどね・・・」
何でこうも四天王と言いバカばっかなんだよ、それは近年の不況のせいに決まってんだろうが。

「とりあえず神託とやらをした神は俺が叩き潰して出雲大社に返品してやる」
「お前の中の神って言うのは宅配品か何かなのか？」
サラッと正也が俺に突っ込む、叩き潰したら返品は出来ないとは思うがな。
「（株）出雲大社って感じでな」
「しかも株式会社なのかよ」
また正也は俺に突っ込む、ナイスツッコミだ。
すると階段の上に何かが見えてきた。
「見えてきました」
階段を登り終え、その先見えたものは・・・なんかライブとかされてそうな建物。
「まるで武道館みたいだな・・・」
俺の言った通り本物の武道館の１／４くらいの大きさの武道館がそこにはあった。
「とりあえず入りましょうか」
「ああ、そうするか・・・」
なんか大層な南京錠がついていたので明道先輩のときのようにピッキングで外した。
「中は道場みたいなんだな」
フローリングの床に壁には習字が飾られてて書かれている文字は≪一球入魂≫って・・・おい待て。
「なんで一球入魂なんだよっ！！　野球部の部室かっ！！」
関西の血が突っ込まずにはいられなかったので、つい突っ込んでしまった。
他に突っ込むところはないかと周りを見回すと部屋の隅っこの方にテレビがあり、そこになんかニートがいた。
「えーと・・・まさかあれが？」
「あれって何がですか？」
あー・・・白羽に見えてないってことはあれが神なのか・・・

「正也には見えているよな」
「あのニートのことか？」
「よかった・・・お前に見えているってことはあれが神ってことだ」
「あれがか！？　でもなんでお前に見えるんだ？」
「そうだなー、〇カと縁があるかじゃないか？」
「ゲームと現実をごっちゃにするな」
でもそれ以外思い当たらない。
「で、どうするんだ謙斗」
「良い案があるから、ちょっと待て」
俺がそう言った瞬間ものすごい地響きがした。
「！？」
俺以外の皆が驚くがニート神は全く動じない。
だがその余裕もここまでだ。

ドゴォッ

壁を破壊する轟音が鳴り響き何かが飛び出してきた、よく見るとニート神を轢（ひ）いている。
「おー、来た来た」
そこに居たのは小学校の運動会とかで使う大玉くらいでかい鉄球を携えたうちの従者。
「ご命令の通り桜鳳家の刃物をすべて集めてまいりました」
俺がさっきコルリに頼んだことの正体はコルリが今言った通りのことだ。
流石に今つけている腕輪だけじゃ日本刀くらいしか作れないのでコルリに鉄を集めてもらってきた。
実はコルリも錬金術が使えるってことを桜鳳神社に来たとき気が付いたが、大抵俺が戦闘を行うために使う機会がなかったがようやく活かす時が回ってきたな。
「お主らは某（それがし）に何か用があるのか！？」

痛そうに頭を押さえながらニート神がこっちにそう叫ぶ、ようやく気づいたか。
「お前の神託に意義があって直接来させてもらった」
「某の神託に間違いなどないわっ！！」
「間違いだから俺がここにきてんだ、お前バカだろ」
こいつのせいでこの神社のやつはみんな馬鹿なのか、納得。
「某をバカ扱いするなど許すまじ、お主よ某と勝負なり！！」
「やっとやる気になったか、とりあえず刀を持っていてくれ」
そういって俺はコルリに刀を渡し、鉄球に触れ錬金術を使って別の物体へと変化させていく。
俺が今回作ったものは神を一撃で殺すって設定があったり、魔装少女になるための道具だったり、ゾンビが持つと限りなく強くなって当たると一撃で殺されたりエトセトラエトセトラな最強の工具≪始原神をも切り刻む血に染まりしチェーンソー（中二仕様）≫である。
形はまるで出刃包丁のような形をしていて、チェーン部分は赤く染まっている。
ちなみにコルリが持ってきた鉄球が少し大きかったので大きめのチェーンソーになっている。
「心高ぶるエンジン音、生きているかのようなこの振動、テンションがってきたぁぁぁぁ！！」

ブゥウウウウウウウウウウウウウン！！

天井高くチェーンソーを掲げながらそう叫ぶ。
「お前さっき叩き潰すって言ってたよな」
そこは痛いところだから突っ込むなよ正也！！
するとニート神の方は高笑いしてなんか言い始めた。
「そんな玩具で某を切り裂くことなど出来「そんなに油断してるとDeath(デス)っちまうぜ？」」

なんかイラッてきたので不意打ちをしてみたが・・・ちっ・・・・
避けられた。
「次は外さねぇぞ？」
チェーンソーを下段の構えで持ちニタァっと笑う。
「三枚に下ろしてやらぁっ！！」
「ひぇぇぇぇ！？」
そう言ってチェーンソーで首を切り落とそうとしたとき――
「！？」

体が動かなくなった。
今まで働いていたすべての運動エネルギーが止まり、まるで時が止まったかのように動けなくなった。
「ざまぁないな小僧！！　某の力を使えばこのようなこ「黙らぬか」
」
ものすごく威圧のある声が神寝殿のなかで響く。
「そこの若者よ、お主には迷惑をかけたのぅ」
声が聞こえた方を向くと・・・・二頭身の少女（？）が居た。
なんとなくねんどろいどに見える。
「お主なぜそんなに驚いているのだ？」
「まさかリアルで二頭身の少女を見るとは・・・・疲れてんのかな俺」
最近戦ってばっかだし、その疲れが今出たのか・・・
しかし、二頭身なのになんか違和感がない、ちょっとは違和感仕事しろよ・・・・
「儂は幻覚じゃないぞ、しかしながら今の時代はこの姿がよいと天照（てらす）が言っておったのだが・・・」
「天照も漫画とかアニメを見てんのかよっ！！」
しまったぁぁぁぁぁぁと思った時にはすでに突っ込んでいた、て言うかいつの間にか動けるようになっていた。

「お主良いキレをしておるのぅ」
予想に反して褒められたっ！？
「それに引き替えこやつは・・・」
その二頭身少女はニート神に可哀そうな物を見る目をしていた、
ニート神・・・可哀そうな子・・・
「で、君は誰なんだ？」
思い切って聞いてみる、神なんだろうけどな。
「儂はそうだな・・・火の神と呼ばれておる」
「≪迦具土神(かぐつちのかみ)≫っ！？」
「確か人間たちはそう呼んでいたのぅ」
迦具土神と言えば日本を作った≪伊弉諾尊(いざなぎのみこと)≫の娘じゃないか！！
「なんでそんな日本を作った神様の娘さんがこんなところに？」
俺の問いにニート神を虫かごのようなものに入れながら迦具土(かぐつち)は答えてくれた。
「こやつは出雲大社からここへ臨時に派遣されたのじゃが全く仕事をせんし、しかも何やら間違った神託を出したとここの土地神から連絡があってのぅ」
臨時に派遣って単語が神から出てくるとはな、俺の（株）出雲大社はあながち間違ってはいなかったようだ。
「あのー誰とお話しされているのですか？」
そういえば俺と正也以外は見えていることに今思い出した。
「君の姿をあいつらに見せれないかな？」
「こやつの件のこともあるしのぅ・・・その願い叶えてやろう」
そう迦具土は言うと見えてない奴らにデコピンしていく、なぜデコピン・・・
「いたっ・・・あれ？　この子いつの間に神寝殿に入ったのでしょう？」
「あいてっ・・・おーかわいい子がいるねー」
「あたっ・・・ほんとだねー」
浅瀬川姉妹は何とも思っていないらしい、お前らマイペースすぎ

るだろ。
　しかしコルリは・・・・
「どうしてこやつは儂のでこぴんをかわせるのだ！？」
　迦具土のデコピンをすべてかわしていた。
「なぁコルリ、お前迦具土が見えているのか？」
「肯定します、この二頭身の迦具土と言う少女を私は目視できます」
　全部見てたのかよ、ってことは聞いてたんだよなさっきの会話。
「迦具土！？　申し訳ありませんでした！！」
　そういって白羽が瞬時に土下座をする。
「神道の者は儂の名前を聞くと必ずこのような反応をするので飽きてしまった」
「仕方ないだろう神っていうのは普通見えないものなんだから」
　幽霊とＵＭＡは居ると思っている俺でも本当に神がいるとは思ってなかったな。
「のぅお主、儂になれなれしくないか？」
「だって俺は神道には興味ないし崇拝する理由もないしな」
　俺が崇拝するのは声優とアニメやラノベの原作者さんのみだからなっ！！
「そんなことを言われたのは初めてだのぅ」
「オタクには上下関係はあんまりないものだからな」
　ただし神と呼ばれる人には敬意を表すけどな。
「天照も同じことをいってたのぅ」
　天照とは気が合いそうだな。
「今度会ってみたいな」
「そうじゃのぅ、お主のことを天照に言うと同じ返事が返ってくるとおもうぞ」
　ますます会ってみたいな・・・・
「儂はここらへんでお暇（いとま）させてもらおうかのぅ」
「そうか、じゃあまたな」
「ほほぅ、お主は儂にまた会いたいと申すか」

「ああ、また会いたいねお前は面白そうだしな」
「ふむ、ではまたこの町に参るぞ」
「その時はもてなしてやるよ」
「楽しみじゃのぅ」
そういうと迦具土の目の前にふすまが現れその中へと入っていった。
和風のどこでもドアなのかよっ！！
「じゃあ、帰るか」
「肯定します」
「そうだな」
「「そうだねー」」
それぞれの返事をしたあと急に正也が叫んだ。
「俺らが来た意味がねぇ！？」
そう言えばこいつらが居ても居なくても同じだったかもしれんな。
「えーと、あれどうしますか？」
白羽が階段の下を指す、階段から下を見るといまだ俺を探す巫女と倒れている四天王が見える。
「どうにかして奴らを説得してくれないか？」
それ以外は暴力しか突破口がない。
「やってみます・・・」
そういうと白羽は一人で階段を下りて行った。

つづく

神様のさばき方（チェーンソー編）（後書き）

ふぅ・・・・終わった
駄菓子菓子！！
次あたりで人物が新とーじょーします。
ええ、予定では二人ほど。
リアフレにこう言われました「キャラ多すぎだろｗｗｗｗ」
読み返してみると・・・・・確かにっ！！
多いｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
まぁ修正する気はないがなっ！！
では次の話に・・・・・期待するなっ！！

嵐の前の何とやら

桜鳳神社の神寝殿での戦い（？）のあと帰るために結局巫女さんたちを叩き潰して帰る羽目になり、家に着いたのは午前1時だった。
白羽はなんだか吹っ切れて俺が叩き潰した巫女さんたちと四天王と自分の父親を本殿の前に正座で座らせ、その場で叱っていた。

そして翌日ー

「それじゃあ、学校に行くぞ」
「肯定します」
そう言って家を出ると京子がインターフォンを押そうとしていた。
「よぅ、京子」
「おはようございます」
「え・・あ・・・おはよ・・・」
京子は慌てて手を後ろに回す、どうしたんだあいつ？
「早く行くぞ」
しかし俺は特に気にせず学校へと歩みだした。

俺たち三人が学校前（富豪派校舎側）の信号を俺たちが渡ろうとした瞬間に赤になった。
信号が青になるまで待っていると俺たちに何かが近づいてくる。
一目見てわかる・・・・神輿だ。
しかしなんで神輿・・・しかも座椅子付きでそこに座っているのは髪の毛が縦ロールで金髪の富豪派一の美女と言われている・・・・
≪芦沢（あしざわ）≫・・・芦沢・・・なんだっけ？　下の名前をド忘れした・・

・あとで井藤にでも聞こう、そしてその神輿を担いでいるのは芦沢先輩のファンクラブっぽい達八人、扱い方が奴隷っぽいな・・・・

「皆さんごきげんようですわ、ほーっほっほっほっ」

何でだろう・・・髪の毛といい、セリフといい、恋〇夢想の〇麗に見えてしょうがない・・・あとリアルで「ほーっほっほっほっ」とかいう人初めて見たぞっ！！

心の中でそう突っ込んでいるといつの間にか信号が青になっていた、俺たちも渡ろうとするがなぜか無意識に横を見る。

するとどうだろうトラックが走ってくる、いやこれだけじゃ普通だな、歩道側の信号が青なのにスピードを落とす気配のないトラックがこっちへと走ってくる。神輿のスピードは普通に歩くスピードと同じ、このままだと無事で済むだろう、このままだとな。

そう考えていると俺の勘の通り親衛隊の一人が見事にこけた、すると神輿全体のバランスが崩れてみんな倒れた。するとどうだろう、向かってきているトラックが目に入った瞬間、我先にとファンクラブの奴らは神輿から離れれいく、どんな状況でも自分の命が一番大事らしい、まぁそれが普通だがな。

しかし芦沢先輩は座席のシートベルト的なものにてこずっていて逃げ遅れていた。

あれじゃやばいな・・・・・まったく・・・しょうがねぇなぁ・・・

・

「コルリ、カバンを頼む」

「肯定します」

俺はコルリにカバンを渡し、車道の中央に立ち右手を前に出す。

「何してるの！？　危ないよ！？」

「何をするって・・・・無論俺はトラックを止めるつもりだぁぁぁぁぁ！！」

ズドォォォォォォン！！

片手に運動エネルギー×トラックの重さが衝撃として襲いかかってくる。
「くっ・・・」
右腕だけじゃ止めれないことを悟り左腕でもトラックを押さえつける。両腕の骨がミシミシきしむ音がする。
パッと運転手の方を見ると・・・寝ていた、多分アクセルを踏みっぱなしで寝てるんだろうな・・・・
これの状況を打破する方法は無いのか・・・何かっ！！　そうだ・・・トラックのエンジンの壊せば止まるはず・・・トラックのエンジンは基本的に運転席の下についているからそこに拳を叩きつければ止まる・・・はずだが・・・いや、今は悩んでいる時間は無い、やるっきゃない！！
「だっしゃらぁぁぁぁぁぁ！！」

バキバキバキッ！！

俺の渾身の左ストレートが決まりそのままトラックのフロントを貫通し、鉄を砕く音がしてトラックのスピードは落ちていき、そのまま止まった。俺の拳はちゃんとエンジンに当たったみたいだな。
「大丈夫でしたか？」
俺はトラックのフロントから腕を引き抜くと何も無かったかのように芦沢先輩にそう声をかける。
「ええ、貴方のおかげで助かりましたわ」
この人、根はいい人のようだな。
俺は芦沢先輩に左手をさし伸ばすと、芦沢先輩はその上に手を乗せ立ち上がる。
「次からは車か自分の足で学校へ来ることだな」
「そうですわね、次からは車で送ってもらいますわ」
そう言った瞬間に右腕に激痛が走る・・・・やっちまったなこれ。
「すまんが京子、俺今日学校休むわ」

「ええっ？　どうして？」
俺は京子に腕を見せながら理由を━
「さっきので右腕の骨が折れたみたいだ」
さらっと言ってみた。
「えええええええええ！？」
俺がさらっと言った意味がなくなったな。
あと大声出すな、骨に響いて痛い。
「ってことで今日はメロンパンなしだが・・・」
ごそごそとコルリが持っている俺のカバンを左手で漁る。
お・・・あったあった。
「代わりにこれでも食っててくれ」
カバンから取り出したのは朝作った俺の弁当だ、今日はちょっとやる気出して弁当作ってみたのになぁ・・・
「じゃあ接骨院い行ってくる」
そういうと俺は足早に保険証を取りに家へと帰って行った、大騒ぎになるのもメンドイしな。

現在接骨院から家へ帰宅中、首から右腕を吊るすと言う定番の姿をした俺は真っ直ぐ家に帰らず公園のベンチに座っている・・・・やることがねぇ。
すると猫が近づいてきた。
「にゃー」
「・・・・どうかしたか斑？」
一瞬で斑だと見破り、名前を言う。
「ナンノコトデスカニャ？」
「お前今すげー墓穴掘ってるぞ」
墓穴どころか正体バラしてるぞ。

「なぜばれたのでしょうか？」
「尻尾をよく見ろ」
斑が化けている猫には二つ尾がついている。
「隠し忘れてましたぁっ！？」
駄目だこいつ・・・早く何とかしないと・・・・
「で、用件はなんだ？」
「いえ、ここは私のお気に入りの日向ぼっこ場所なのですよ」
俺はそれを聞くとため息をこぼした。
そして斑を持ち上げ膝の上へと乗せる。
「5月の太陽の日差しは気持ちいいな」
「そうですねー」
じわじわと体の芯から温まっていく感じがする。
「そういえばその腕はどうかしたのですか？」
「色々とあってな」
「まさか桜鳳家襲撃の件での怪我ですか！？」
「違うって」
俺は勘違いされては困るため斑に右腕が折れた経緯を話した。
「流石は謙斗様ですね」
「人として当然のことをしたまでだ」
素手でトラックを止めるなんて普通の人じゃできないことだがな。
「そう言えば謙斗様、正也様がお渡しになった刀の方はどうしていますか？」
「俺の部屋の壁に飾ってる、手入れも時々しているけどそれがどうかしたか？」
「・・・・いえ、何もありません」
「そうなのか？」
何もないなら聞くなよ。
そう思いつつケータイの時計を見る。
「もうこんな時間か・・・」
そう言うと俺は膝の上の斑を下ろし、立ちあがった。

「もう家に帰るな、じゃあまた今度な」
「はい、ではお気をつけて」
俺は斑と別れを告げ、公園から出て家へと帰って行った。

寄り道から帰って、家の中に入るとシャワー音が聞こえる・・・
香苗姉さんは今日は仕事（何の仕事かは不明）のはず、今現在家に居るのは俺のみのはずだ。
俺は急いで自室へと向かい、正也から貰った刀を左手で持ち風呂場へと向かった（学校はアクセサリー禁止なので腕輪は外している）。

風呂場の扉の前で左手で刀を振り、遠心力で鞘を抜く。
シャワー音はいつの間にか止んでいた、だがまだ気配は風呂場の方にある。相手も俺の存在に気付いた様で飛び出す機会を待っているようだ。
沈黙と言う名の攻防が続いていく・・・先に痺れを切らしたのは俺だった。
風呂場の扉を思いっきり開き、壁に当たらないように注意しながら刀を振る。
「「！？」」
相手の顔を見た瞬間驚いたしまった、しかし相手も俺と同じように驚いていた。
「なんでお前が居るんだ・・・古刀」
「なんで旦那こそ、ここに居るんだよ」
二人とも同じような反応をするが、俺がここにいる理由はここが俺の家（香苗姉さんのだけど）だからだ。
「とりあえず服を着ろ、話はその後だ」
「・・・うぇわぁっ！？」

目の前に居るのはバスタオルを羽織っただけの古刀・・・こいつは着やせをするタイプか・・・
俺は器用に片手で刀を鞘へと戻し、リビングのソファーに座る。
「またせたね」
そう言いながら浴衣姿の古刀が現れ、俺の隣に座る。
「どういうことか教えてもらおうかぁ？」
少し怒りを込めた声でそう古刀に質問する。
「おおお、落ちつけよ旦那」
「落ち着けるかっ！！」
これって不法侵入扱いしてもいいよね？
ん？　でも何でこんなところに古刀が居るんだ？
「実は・・・かくかくしかじかで・・・・」
「へぇ～そうだったのか・・・って分かるわけないだろっ！！」
「ええっ！？　分からなかったのか！？」
それで説明出来たら苦労しない。
「えーとだな、私旦那と長様の通信役に抜擢されたんだ」
「長？」
「蛟様のことだ」
「あー正也のことか」
そういえばあいつここら辺の元締めだったな。
「ってことはこの刀がお前の本体なのか」
「そうだよ」
付喪神って本体が人の姿になるんじゃなくて、本体から人型の精神体っぽいのが出てくるんだな。
「でもなんでお前なんだ？　斑とかの方が猫になれるから伝令しやすいんじゃないか？」
「今あたい達妖怪も人手不足なんだ」
お前は妖怪じゃなくて付喪神だけどな。
「そういえば明道先輩の家に押しかけた時に増援としてきた妖怪たちは皆女ばっかだったな」

代表の三人も女だったしな・・・妖怪ってアマゾネス的な感じなのか？
「あの日の数日前にあたい達の集落に陰陽師共が押しかけてきやがってな・・・それで男たちはみんなやられちまって・・・あの時長様が来てくれなかったら全滅していたな・・・」
古刀は顔を下に向け声を震わせながら話してくれた。
「桜鳳寺のやつらか？」
「いや・・・・奴らの服についていた家紋は桜鳳のものじゃなかった」
桜鳳家の家紋は名の通り散っている桜を背景にした鳳凰が描かれている。
「どんな家紋だったんだ？」
「流れる川を背景にした玄武が描かれているものだった・・・」
「ちょっと待ってろ」
そういうとリビングにあるＰＣ（共有用）の電源を入れ、ググってみる。
「これか・・・？」
古刀の言った通りの家紋の画像が現れる。
「≪流亀（りゅうき）≫って言う陰陽師の家系か・・・・」
平成ライダーでいたよな同じ名前の奴、漢字はちがうけど。
「どうやら桜鳳家とは血縁の様だな」
元々は同じ陰陽師の血族で桜鳳家はそこに剣術の血が入っているらしいが、流亀家はそこに陰術師の血が入っているらしい。
「少し厄介だな・・・・」
前に言った通り、陰術って言うのは幻覚や人払い・金縛りなどの戦闘補助系の術を使う東洋の魔術だ。
それに陰陽師の様な妖怪退治専門の術を使えるとなると、妖怪たちにとっては脅威でしかない。
「何はともあれ、次お前らに手を出したら俺がぶっ潰してやるよ」
俺がそう言うと古刀は少し微笑んだ。

「そのときゃ頼むぜ、旦那」
「おう、任せろ」
流亀家か・・・また戦いが起こりそうな予感がする・・・・めんどくせぇ・・・・
「あとその腕どうしたんだ？」
今更気づいたのかこいつ・・・
「ちょっと骨折ってな、さっき病院に行ってきたところだ」
「まさか「桜鳳家は関係ないからな」」
古刀はなんで言おうとしたことが分かったんだ？的な顔をしている。
てか、お前あの時俺が持ってただろうが。
「さっき斑に会ってな、同じことを言われたんだ」
「あいつまたサボってるな！？」
お前らが活動するのは逢魔ヶ時じゃねぇのかよ・・・そう心の中で突っ込んだ。

そんでもって翌日━

「じゃあ姉さん行ってきます」
「行ってまいります」
「いってらっしゃい～ふわぁぁ～」
今日は姉さんの仕事は休みらしい・・・平日に休日がある会社っていったい・・・・
玄関を出ると京子が今日もいた。
「よう、どうかしたのか？」
「いやっ・・・その腕で大丈夫かなって思って」
「大丈夫だ問題ない、一番効率のいいカルシウム製品を頼む」
「それって駄目だよね！？」

よし、いつもの調子に戻ってきたな。
「さっさと学校に行くぞ」
「マ・・・謙斗さん、少しご報告が」
「なんだ？」
「実は隣の八組に「お前ら早くしないとおくれるぞ？」」
学校に走って行こうとする正也にそういわれてケータイの時計をみると・・・８時２０分。
「走るぞ！！」
「肯定します」
「ふぇぇぇぇ！？」
コルリが何か言おうとしていたけど、学校で聞こうと思った・・・
それがいけなかった・・・・

全力で走っておかげで遅れずに学校に着いた。
教室に入ると井藤が何やらカメラを磨いていた、一眼レフとはまたマニアックな・・・
「よぉ、ヤナギー」
「ういっす、井藤」
「ヤナギーに朗報だ、昨日転校生が二人来たんだぜ」
一昨日コルリが来たのにまた転校生がきたのか・・・・
「そんでもって一人はこのクラスでもう一人は隣のクラスに来たんだ」
「じゃあうちのクラスには一人来たのか」
「うちのクラスに来たのは金髪の子でいかにもお嬢様っぽい子だ、スゲーかわいいぞ写真見るか？」
「別にいいが、お前それ許可もらって撮ったのか？」
「いや盗撮だ」
「お前なー・・・・」

こいつ絶対にいつか捕まるな・・・・
「そんで、隣のクラスの子は飛び級で来たから歳は１０歳の幼女らしい」
「そんなあず〇んが大王のち〇ちゃん的なやつが本当に居るんだな」
どんな奴なんだろうか・・・やっぱりツインテールか？
「そういえばうちに来た金髪の子は婚約者（フィアンセ）を向かえに来たとか言ってたな」
「そんなやつ居んのか？」
こんな庶民派の校舎に婚約者なんて居るのだろうか、居るとしたら富豪派の方だと思うんだけど━
「・・・・・あ」
「どうかしたのか？」
「いやー・・・・心当たりがあるなーって」
「「「「あるの（かよっ）！？」」」」
コルリ以外の正也・京子・井藤に突っ込まれた、皆キレがいいのは気のせいだろうか。
「実は俺の亡くなった爺さんは大富豪でな・・・俺の両親が結婚するとき絶縁したんだけど、俺はちょくちょく親に秘密で爺さんの家に遊びに行ってたんだ、両親とは仲が悪いのに俺のことはすげー可愛がってくれてなー・・・で、ここからが本題だ」
俺の爺さんは三〇院家をも越える金持ちだった、ちなみに現在の当主は俺の婆さんがやっている。
「ある日遊びに行ったら客が来ていて、その人は海外の会社の社長さんで娘を見せに来たらしくてな。その時に口約束で婚約の約束してたって言う記憶がたった今頭のすみっこから出土なされましたー」
あははは と笑いながらそういう、多分違うと思うけどな。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、それぞれが席に戻っていく。

「皆席につけー」
そう言いながら担任が教室に入ってきた、例の転校生の姿はない。
「えーと、昨日来た転校生は定例株主総会とか言うので今日は来られないらしい、以上だ」
株主総会ってことはどっかの会社の株主なのか・・・てか何で庶民派に転校してきたんだ？
庶民の中に一人だけ富豪ってスゲー場違いだろ。
そう考えている中、一時限目が始まった。

～授業を吹っ飛ばして昼休み～

「アァァァァァァァイキャァァァァァァァァァァァァンフラァァァァァァァァァァイィィィィィィィィ！！」
実際は飛べないのにそんなことを言いながら四階にある教室の窓から校庭へと飛び出す。
片腕が折れていても行動は変えない、それが俺クォリティだっ！！
そしていつも通り一番で購買車に到着。
「あら、昨日は来なかったけどどうしたの？」
「実は腕を折っちゃいましてね」
「それは大変ねぇ」
「右腕だと不便で仕方ないですよ」
「それじゃあ右腕が利き手なの？」
「いえ、俺は希少価値の高い両利きですよ」
両利きとは言ってもこの世の中には右手用の物が多くて左手じゃ色々とやりにくい。
「で、今日は何にする？」
「メロンパンを二つください」
「他のパンはいらないの？」
「最近は弁当を作ってきているんで他のはいいです」
「それでも購買に来てくれるなんて嬉しいわね」

「ここのパンは世界一ですから」
そう言って笑って見せる、ここのパンは他のパン屋のパンとは二次元と三次元ぐらい違う。
でも平面と立体くらい違うって意味わからんな。
「ここであったが百年目だ一年のクソガキィ！！」
背後から聞こえてきたのは柔道部武将・・・と空手部主将と剣道部主将。
「え？　ボン〇ラーズ？」
「「「ボン〇ラーズって言うな！！」」」
三人ハモって反論する。
てか剣道部主将は胴当てと小手をつけて竹刀持ってるんですけど・・・卑怯じゃね？
「あーパン預かっててもらえます？」
「行ってらっしゃーい」
右腕の傷にさわなきゃいいんだが・・・・まぁ大丈夫か。

戦闘開始

「先手必勝！！」
剣道部主将が竹刀で切りかかってくる。
「必ずしも先手が勝つとは限らないですよ？」
右、左と体をさばき、竹刀をかわしていく。
「何をっ！！」
ムキになったのか竹刀を振る速度が上がった。
しかし俺には当たらなーい。
「これなら当てれるだろっ！！」
いつの間にか柔道部主将に背後を取られていた、そして俺を羽交い絞めにする。
「めぇぇぇぇん！！」
このままじゃやばいっ・・・・なーんてな。

「どっせぇぇぇぇぇぇぇぃ！！」
上半身を思いっきり前に倒し、手を使わずに羽交い絞めをしている柔道部主将を投げ飛ばす。
「「！？」」
竹刀が柔道部主将に当たり、そしてそのまま剣道部主将を巻きこんで倒れた。
「隙ありっ！！」
急に右から空手部主将の正拳突きが襲いかかってくる、俺はそれを避けようと━

ズキッ

「っ！？」
急に右腕が痛み、反射的に右腕を庇ってしまった。
そのまま拳が俺に当たって・・・・当たっ・・あれ？
後ろを振り合返ると小さな手が空手部主将の拳を止めていた。
「けが人相手に三人がかりなんて卑怯じゃありませんか？」
そこに居たのは・・・え、白羽？　しかも何でうちの高校の制服着てんだ？
「えーと・・・とりあえずやるか」
「わかりました」
よく分からんが今はやるしかないな。
俺と白羽は背合わせになり拳を構える。
「すべての力を左腕へ・・・・・」
「速きこと風のごとく・・・」
そう唱え攻撃へと移る。
「一点突き！！」
「疾風迅雷！！」
俺の拳が剣道部の胴当てを砕き、豪快に鳩尾（みぞおち）に当たる。
白羽の方は素早い動きで柔道部主将と空手部主将を行動不能にす

る。
「まぁ・・・・とりあえず屋上に行くか」
沙希さんからメロンパンを受け取り、屋上へと向かった。

「で、これはどういうことだ？」
「痛いです、マ・・・謙斗さん」
拳を鉄菱にし、コルリの脳天にぐりぐりと押さえつける。
てか俺のことを学校では謙斗と呼べとは言ったけど、何でいちいち詰まるんだよ。
「今朝ご報告しようとしましたが遅刻しかけましたのでご報告できませんでした」
あー、そう言えば正也に遮られたな。
「て言うか離れろっ！！」
あぐらをかいている俺の膝の上には白羽が座っている、俺はソファーじゃねぇぞ。
「私の望みはお兄様とこうしていることです」
望みを叶えるとは言ったが・・・・しかもお兄様ってなんだよ・・・
「なんで俺がお兄様なんだよ・・・」
お前と契りやら杯やらを交わした記憶はないがな。
「お兄様はお兄様だから私のお兄様なのですよ」
バカ〇ンのパパみたいな理屈だな。
「とりあえず睨まれてるから離れてくれ」
浅瀬川姉妹と明道先輩と京子とコルリの視線が痛い・・・
「・・・分かりました」
白羽は未練があるように俺の膝から離れ、明道先輩の隣に座る。
「で、どういうことか説明してもらおうか」
呆れ気味に白羽に聞く。

「えーとですね、お父様に頼んでここの高校に転入することを頼みまして、そうしたら私は十歳なので飛び級のテストをしまして、すると１００点を出しちゃいまして、そうしてここへ転入することが出来ましたためでたしめでたし」
「めでたくねぇ！！」
何がめでたいのかさっぱり分からんわ！！
て言うか話を聞くとこいつかなり頭いいのか？
「できればお兄様と同じクラスがよかったです」
「二兎追うものは一兎も得ずって言葉があるだろ、欲張りすぎると損をするぞ」
「でもお兄様とこうして居られるなら損してもおつりが返ってきますよ～」
そう言ってニコッと笑顔を見せる、明道家を襲撃した時は冷徹な感じだったが、それがウソのようだ。
そして昼休みは過ぎていった。

～そして放課後～

「さっさと家に帰ってネトゲでもするかー」
「じゃあ何時集合にするんだ？」
「あ、私も参加するよ～」
「じゃあ８時にロビー１３で集合だ」
「了解」
「おっけー」
俺と正也と京子は分かる人しか分からないネトゲの事を話す。
「８時に外出なさるのですか？」
「私もついて行きますお兄様！！」
この二人はネトゲのこと知らないからこういったボケをかましてくれる。
「大丈夫だ、ＰＣのオンラインゲームで会うだけだ」

「？」
「へ？」
二人ともよく分かってないらしい。
「ネットの中で会うってことだよ」
京子がそう補足する。
「そう言うことですか」
「・・・！！」
コルリは納得するが白羽は顔を赤くしていた、まぁあんな恥ずかしいこと言ってたしな。
そんなことを話していると誰かが近づいてきた。
あの人は昨日の朝助けた芦沢・・芦沢・・・なんだっけ？
「えーと芦沢・・・下の名前なんでしたっけ？」
「くれないと書いて紅ですわっ！！」
「≪芦沢（あしざわ）紅（こう）≫先輩・・・そう言えばそうでしたね、ようやく魚の骨がのどにつっかえていた感じが取れました」
「私は魚の骨程度の存在なのですかっ！！」
「俺は興味ないことに関しては鳥頭なんですよ」
本当にすぐ忘れちゃうんですよ、困ったものです。
「それともかく、この後ご予定はありますか？」
「いえ、特にはないです」
「では昨日のお礼をするために私の家に来てもらえませんか？」
「こいつも一緒に連れてっていいですか？」
「よろしいですわよ」
「じゃあ私もお兄様について行きます！！」
「「私たちもー」」
なんで浅瀬川姉妹と白羽もついて来ようとするんだよ・・・しょうがねぇ・・・
「明道先輩よろしくお願いします」
「はいはいはぁーい」
俺がパチンと指を鳴らすと、どこからともなく明道先輩が姿を現

し、拳をにぎる。
「コルリ、行くぞ」
「肯定します」
「外に車を待たせていますので、そちらへ」
門の外へと歩いて行くさなかで・・・
「「「「みぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」」
・・・・悲鳴が聞こえてきたのは言うまでもない。

「・・・・・でかっ」
車から降り、芦沢先輩の家を見て発した第一声がこれだった。
ちなみに今回は門ではなく家自体がでかい。
「「「「おかえりなさいませ、お嬢様」」」」
そしてメイドさんたちの出迎え、ここはアキバかっ！！
「とりあえずこの部屋でお待ちください」
挙句の果てはセバスチャンと言われてそうな執事に客室に案内される。
「突っ込みどころ多すぎだろ・・・」
ここへ来る前に見た部屋の名前や、飾れていた物に俺の中に流れる関西の血が「突っ込め」と疼きまくってしょうがなかった・・・
「なんでギ〇ンの胸像なんてあるんだよ・・・」
ここの家の主はガンオタなのか・・・しかもジ〇ン派。
「お待たせしましたわ」
扉が開き、私服を着た芦沢先輩が客室へと入ってくる。
「芦沢先輩のお父様はガンオタなんですか・・・？」
「廊下のあれのことですわね・・・」

これ以上聞くと地雷を踏みそうなのでもう聞かないことにしよう・・・

「そんなことより、先日はありがとうございました」
芦沢先輩は頭を深々と下げる。
「別に頭を下げなくてもいいですよ」
「でも貴方は私の命を救ってくださった恩人ですので」
上流階級のたしなみってやつか、流石富豪派。
「それで今日はそのお礼にと貴方を呼んだのですが・・・」
「何を渡せばいいのか分からないご様子ですね」
「うぐっ・・・・」
コルリが核心を突く・・・どうやら図星のようだ。
「こほんっ、と言うわけで貴方の欲しいものを言ってくださいまし」
「俺の欲しいもの・・・」
欲しいものなんて最近は考えたことないな・・・
「そうだな・・・デザートイーグル・・・」
「へ？」
「デザートイーグルが二丁ほど欲しいです」
「実弾のですか？」
「いえ、モデルガンのです」
「で、ですわよね・・・」
「あと腰に付けるタイプのホルダーも」
「分かりましたわ、では後日渡させてもらいます」
「ありがとうございます、では帰らせてもらいますね」
「セバスチャン！！　お二人をお送りしてくださいまし」
やっぱりセバスチャンだったっ！？

セバスチャンと言われた初老の執事が運転する車で穂見浦宅へと

無事帰宅した。
「ただいまー」
「ただいま帰りました」
「おかえり、旦那」
俺たちを迎えたのは古刀・・・なんか普通にくつろいでるっ！？
「あれ・・・姉さんは？」
「何処かに行ったけども？」
あの人は気が付いたら何処かへふら～っと行ってしまう人だからなぁ・・・
「とりあえず飯にす「バン！！　バン！！　バン！！」」
「・・・・・・・・・・」
「銃声ですね、どうしますかマスター？」
全く次から次へと一体何なんだよ・・・・
「・・・・とりあえず行くか」
「肯定します」
「分かったよ」
・・・・発砲音の聞こえたところへは行くのは準備をちゃんとしてからでいいか？

つづく

ヨーロピアンな客人

俺とコルリは姿を隠すため大きめのフードが付いたパーカーを着て外へと出る。

「銃声の聞こえたところへはあと何メートルだ？」

「約５６２ｍです、ご主人様（マスター）」

現在俺とコルリは銃声の聞こえた方向へ急いで向かっていた。

「にしても・・・町中で発砲するなんてどこの馬鹿なんだ？」

「少しは自重してほしいものです」

「全くだ」

せめて消音器（サプレッサー）くらい付けろよな、本当に馬鹿か。

突然だが、説明しよう！！　消音機（サプレッサー）と言うのは銃声を抑えるために銃口の部分に付ける物だがそこまで音は抑えられないとかいう、無いよりかはマシな感じの器具だ！！

「・・・・止まれ」

小声でコルリにそう言い、十字路の角にＳＷＡＴっぽく身を隠す。

「貴――がなぜこ――るのだ」

俺は十字路の角からそっと様子をうかがう・・・が会話がよく聞き取れない。

距離が遠いために聴覚は意味がないみたいなので十字路の角からそっと顔を出し、視覚に頼ってみる。

「あれは・・・」

俺の目には修道女（シスター）の姿をした少女とフード付きマントを羽織った二人組が対じしている様子が見えた。三人とも着ているマントや修道服で顔が隠れて顔はよく見えない。

だが俺はマントの二人組に何か妙な違和感というか既視感を感じた。

「古刀、出てこい」

「なんの様だい？」

小声でそう言うと俺が持っている刀から女性が出てくる。
「すまないが援軍を呼んできてくれ」
「承知したよ」
そう言ってその場で透明になって消えていった。
「俺たちも動くか」
「肯定します」
フードを被り左手で刀の柄を持ち、十字路の角を曲がる。
「全く・・・この町に何の用だ？」
ゆっくりとマントの二人組に近づいていく。
「理由によっては・・・血を見るぞ？」
遠心力だけで刀を抜くと沈みかけの太陽の光が反射して一筋の光が綺麗に反射している。
「ふふふっ・・・怪我人が格好をつけても良い絵にはなりませんわよ？　それにそんな物で私たちに傷をつけれるとでも思っていらっしゃるのかしら？」
完璧に馬鹿にされてるな、だがその余裕がいつまで続くだろうな？
「そうだなぁ・・・可能だと思うぜ？」
「では賭けてみるかしら？」
「俺は可能の方に賭けてやるよ」
「それなら私は不可能の方に賭けますわよ」
「・・・・以下同文」
俺とマント二人組の意見は出揃った、あと一人の意見が出れば出揃うんだが・・・
「お前はどっちなんだ？」
「え・・？　あ・・私は可能な方で」
修道女（シスター）姿の少女話しかけると少し驚きながらも返答する。
「全員出揃いました、ではご主人（マスター）様」
「おう」
左手だけで刀を持ち中段で構え、一気にお嬢様っぽい口調で話していたマントを被っているやつの喉元へ狙いを定める。

「・・・見えたっ！！」
風を切る音が短く鳴り勝負は一瞬で決まる、結果は―
「俺たちの勝ちだな」
「！？」
刀は喉元の横を通り、首筋から一筋の血が流れる。
「銀の剣！？　でも銀の匂いはしなかったが・・・」
「この世の中には不思議なことが溢れている、妖怪・祓魔師（エクスソシスト）そしてこの俺、錬金術師もまた然（しか）り」
「まさか・・・貴方・・・」
「俺はこの町を守護する錬金術師だ、観光以外の用がある吸血鬼（ドラキュラ）さん達はヨーロッパに強制送還してやんよ」
ヨーロッパって正確には州の名前だからどの国から来たのかは分からないけどな・・・とりあえずイギリスに返すか。
「やはり私たちの姿を・・・」
「・・・・危険分子」
そう言いナイフをマントの奥から取り出して構える。
圧倒的に不利と思った瞬間―風が変わった。
「チェックメイトだな」
「ふふっ・・・それは私たちの言葉ですわよ？」
「いや、俺たちの言葉で合っている」
俺はニヤリと笑い、コルリがいつの間にか持っていた鞘へと刀を納める。
「さて、太陽も沈んだし始めようじゃないか・・・」
そう言うと俺の後ろの道から無数の足音が聞こえてくる。
「・・・・まさかあれは！！」
修道女（シスター）姿の少女は驚いて目を見開いていた、普通の人だったら気絶するか逃げるかすると思うが、流石は神に仕える者だな。
「逢魔ヶ時の暗き道、その道は通ってはいけません」

「何故ならば、そこをまかり通るは我ら妖怪じゃ」
「それを見たものは怯え、そしてこう言うだろうねぇ」
お決まりなんだなそのセリフは・・・
「「「百鬼夜行と」」」
今回はセリフは盗らないでおいてやった、ありがたく思え！！
って今はそういう状況じゃないな。
いつの間にか俺の背後には無数の妖怪たちがうごめき、攻撃するのは今か今かと待っている。
「形勢逆転ってやつだな、さてどうするんだ？」
「クッ・・・」
「・・・撤退優先」
「・・・ですわね・・・行きますわよっ！！」
そう言って二人は西の方向へ去って行った、良い判断だな。
さて、ここからが本題だ。
「・・・で、こんな町中で銃を使ったのはお前だな？」
「・・・！？」
これはただの推測だが、マントの二人組は俺と戦おうとしたときナイフを出した、あの距離なら銃の方が有利に戦えるはずなのにな。それで消去法を使うと修道女（シスター）姿の少女が使ったことになる。まぁ根拠は限りなくゼロだがな。
「困るんだよなー町中で発砲するとかさ、せめて消音器（サプレッサー）を付けてくれないと町の人たちに勘付かれるだろ？」
しかもここら辺の妖怪たちが銃声に驚いて暴走しかねん。そうすれば妖怪たちの正体がばれかねない・・・それで妖怪捜索番組でも来てみろ・・・最悪じゃないか。
「とにかく次はもう少し静かに戦ってくれよ、ヴァチカンの祓魔師（エクソシスト）さん」
「何故私の正体を・・・・貴方は何者ですの？」
「俺はアトランティスの錬金術師の末裔だ・・・って言っても生まれも育ちも日本だけどな」

こういう場合はアトランティス系の日本人ってことになるのか？
「さて、もうお開きとするか」
「肯定します」
「それに早く飯作らなきゃならないしな」
今日は家に姉さんが居るから早く帰って作らないと姉さんがごねてしまう。
今更だけど俺の従姉なのに何でそんなに子供っぽいんだよ香苗姉さん・・・あ、こ〇たの吸収か・・・なるほど・・・って言うかなに一人で納得してるんだ俺。
「お前らももう帰っていいぞ、ご苦労だったな。あと、まだここらへんに吸血鬼（ヴァンパイア）が潜伏している可能性がある、各自警備をより厳重にするようにしろ」
「分かりました」
「了解じゃ」
「承知したよ」
「それでは、解散！！」
これで今回の騒動は一段落・・・と言いたいところだが何かが始まりそうな気がする。
「お前も早く帰れよ」
俺はそう言って家へ帰る道を歩いて行く、あーもう何か疲れたな、早く帰ってネトゲしよ・・・

──「あの人は・・・」
東洋の怪物（モンスター）とパーカーを着た二人が去った後、私はそうつぶやく。
私はフードで顔が見えなかったけれども直感的に錬金術師と名乗っていた男が私の探していた人だと分かったわ。数年前に初めて会った時に好きになった人、あの時の私は恋と言うものが分からなくて迷っていたわ、でも貴方は私の手を引いてくれたよね・・・それ

が嬉しかったのを私は覚えているわ・・・貴方は私のことをまだ覚えてくれているのかしら？
「お嬢様ー！！」
「遅かったわね、クリス」
「すいません、お嬢様」
この男は《クリス・レディフィオ》、私の執事だけども大抵のことは自分でしてしまうから居ても居なくても同じ存在。
「でも、そのおかげであの人に会えたわ」
「まさか・・・彼は一般人では？」
「詳しいことは分からないけど・・・悪い気分じゃないわ、むしろ・・・」
私は空に浮かぶ月を見て微笑み・・・
「今は最高の気分よ」
・・・そうつぶやいた。

つづく

架空の激戦

あの後急いで帰ってきたが・・・今の時間は8時11分・・・やべぇ11分オーバーだ。
俺は急いで自分専用PCの電源を入れる。
ファンの音がしてその後に心地よいWin○owsの起動音が鳴る。
起動した瞬間にデスクトップ上にあるショートカットをダブルクリックし、ゲームを起動する。
するとデスクトップ画面がゲーム画面へと切り替わって制作会社名が映し出される、だが今は急いでいるため、それをクリックして次々に飛ばしていく。
連続でクリックしていくとようやくゲーム名が出てくる。

【Freedom world（フリーダム ワールド）】

ゲームの内容はゲーム名の通り自由だ、だが自由すぎてPKをするプレイヤーやチーター（改造厨）が居たりする。
チーターの方は通報すれば運営が対処してくれるんだがPKはどうも公式として認められているらしいので、俺の様なプレイヤーがPKプレイヤーを粛清しなければならない。
一つ訂正するが、俺は死の恐怖ハ○ヲのようなPKKを行う場合があるが、普段はハイテンションなレアアイテムハンターだ。
タイトル画面をクリックするとキャラの選択画面が現れ、今から使うキャラを選んでゲーム世界へとダイヴする。

≪丹波の黒豆さんが入室しました≫

広場の入り口に俺のキャラが現れる。
俺のキャラの服装は動きやすい様に設計されたス〇ークの様な軍服だ。腰の両脇にはガンホルダーが、背中には狙撃銃・散弾銃・榴弾銃が装備され、腕にはスナイパー用のグローブを、そして軍用のサバイバルナイフ付きブーツを履いている、あと顔はキャ〇トの様なヘルメットで隠している、顔を隠している理由は秘密だ、ちなみにすべて黒で統一しているがそれは俺の譲れないこだわりってやつだ。

丹波の黒豆「すまん遅れた」
俺がそう書き込むと広場の中央に居た見慣れた二体のＰＣ（プレイヤーキャラクター）が俺のキャラに近づいてくる。
アーサー王「大丈夫だ」
京豆腐「そうだよ、全然オッケーだよ」
そう言ってもらえるとありがたい、ちなみにアーサー王が正也、京豆腐が京子だ。
正也のキャラは赤い修道服を着て頭には王冠がのっていて、剣の形をした杖を持っている。よく見ると肩にレアペットモンスターが乗っている。うむ・・・うらやましい。
京子のキャラはでっかい鎧を装備して、頭にはティアラを付けていて、背中には大盾とロングソードを装備している。とても硬そうだ。
ちなみに俺たち三人ともＬＶはすでにカンスト済みだ。

≪アルケンティナさんが入室しました≫

そう話しているともう一人広場に入ってきた、そして一直線に走ってこっちへと近づいてくる。
丹波の黒豆「お、来たか」

アーサー王「お前の知り合いか？」
丹波の黒豆「知り合いも何もこいつはコルリだ」
京豆腐「へー、コルリちゃんだったのかー」
アルケンティナ「肯定します」
　実はと言うとさっきからコルリに操作法を教えるために自分お部屋にある自分専用ＰＣとリビングにある共有用ＰＣの間をを行ったり来たりしている。

丹波の黒豆「うちの共有用ＰＣからインさせてるから俺よりは反応が遅いがな」
アーサー王「お前は自分のＰＣのスペックを上げすぎだｗ」
京豆腐「確かに・・・ＮＰＣとかマザボもかなりいいの使ってる死ね～」
丹波の黒豆「多分変換ミスだと思うが、その間違いは致命的だぞ」
京豆腐「あ、ゴメンゴメン」
アーサー王「で、今からどうするんだ？」
丹波の黒豆「コルリのＬＶ上げに行くからミッションを貼るわ」

≪摩天楼の狙撃手［ＥＸ］≫が選択されました、ゲート｜解放≪オープン≫

アーサー王「お前これ好きだよなぁ・・・」
丹波の黒豆「俺のジョブはレアな万能射撃者（マルチ・ガンナー）だけど狙撃が一番得意だからなｗ」
　あと正也はアーサーなのに精霊召喚師（フェアリー・マスター）、京子は豆腐なのに重装騎士（ヘヴィー・ナイト）だ。
京豆腐「でも私みたいな重装騎士はきついよぉ（＾｜＾；）」
丹波の黒豆「お前はその持前の防御力で出現する敵を食い止めろ」
アーサー王「ダム戦法か承知したぜｂ」
京豆腐「おっけー」

アルケンティナ「私は何をすれば？」
丹波の黒豆「お前は・・・新ジョブの機甲兵か（アーマード・ソルジャー）」
機甲兵は工房で専用の強力な装備が手にはいる・・・だがコルリはＬＶ１だし、素材とか持ってないから・・・俺が作るしかないか。

カーンカーンカーン（工房の金属を叩く音）

丹波の黒豆「・・・結構金を持ってかれた」
アーサー王「ドマｗ」
京豆腐「ドンマイｗ」
丹波の黒豆「とりあえずこの武器と防具を登録しろ」
とりあえず作った武器と防具をコルリへと渡す。
アルケンティナ「登録してみましたが皆様のように服装は変わらないのですね」
武器や防具を登録するとキャラの外見が変わるんだが、コルリのキャラは初期服装の一般的につなぎと呼ばれている作業服の上だけを脱いで下に着ているタンクトップを見せている姿だ、機甲兵の登録の場合は服装は変化しないようだな。

丹波の黒豆「戦場に行けば何かわかるかもな」
そう言うと俺はコルリの（キャラの）手を引き、ゲートをくぐる。
光に包まれ目的地へと到着する――
アルケンティナ「これは・・・！！」
そこには細かいところまで正確に作られた摩天楼が映し出されている。
このゲームのグラフィックは地デジテレビの数倍は綺麗で精巧に作られていると言う変な方向に気合を出している。
丹波の黒豆「京子と正也はさっき言った手順でやってくれ、コルリはここで俺が操作方法を教えるからその的として敵を殲滅するぞ」

アルケンティナ「分かりました」
丹波の黒豆「ミッションスタートッ！！」

そう俺が言うと全員ベースキャンプから戦闘エリアへと移動する

京豆腐「硬化魔法（ガーディン）！！」
開始早々に京子は重装騎士専用の効果付与魔法（エンチャント）を唱える、パーティ全員の防御力が上がる。
アーサー王「召喚（サモン）、鉄鋼人形（メタル・ゴーレム）！！」
正也は高位召喚師専用の精霊を召喚する、しかも三体。
アーサー王「ゴーレム、奴らを食い止めろ！！」
ゴーレム「ヴォォォォォォォォォォォ！！」
ゴーレムは人型のロボットを押さえつける、それはまるで暴動を起こした一般人を抑え込む機動隊みたいだ。
その間に俺とコルリは急いでビルの上へと登る。

ここで出現するモンスターは自動人形（オート・マタ）と重爆戦闘機（ボム・テロ）、オートマタは地上型だがボム・テロは空型のくせして対地攻撃をしてくるので厄介なうえに遠距離攻撃でないと倒せないので今まで俺しか破壊できなかったが、機甲兵が居ればそいつらの始末も楽になる。

丹波の黒豆「お前が登録している両肩の対空ミサイルポッドはあのボム・テロに対して有効だ、とりあえずさっき教えた通りに登録した武器を召喚して攻撃してみろ」
アルケンティナ「肯定します」
そう言うとコルリのキャラの肩にミサイルポッドが現れ、一斉射撃する。
丹波の黒豆「お、一機撃墜」
俺の画面には　堕ちていくボム・テロが映し出されている。

丹波の黒豆「だが無駄弾が多いな、スコープモードでロックオンしろ」
アルケンティナ「肯定します」
射撃系のジョブを持つキャラはスコープモードにしたときは特殊なモーションを行うが・・・機甲兵の場合は――おお、頭についていたゴーグルを装着するのか、次サブキャラを作るとき機甲兵にしようかな――そう思っているうちにミサイルが画面上全てのボム・テロに当たる。
まさか・・・複数（マルチ）ロックオンだと！？　万能射撃者でも単体ロックオンしかできないのに！？
アルケンティナ「これでよろしいのでしょうか？」
丹波の黒豆「お・・・おぅ」
なんか俺要らないんじゃね？的な感じになっているがそこは気にしたら負けだっ・・・新ジョブによる旧ジョブの劣化なんてよくあるじゃないかっ・・・頑張れ俺・・・グレイトゥ！！
うん、なんか元気出たかも。
さーて、気を取り直して――

【ＥＲＲＯＲ　ＥＲＲＯＲ】

・・・一体何なんだよ・・・全く。
丹波の黒豆「エラー？」
アーサー王「急にオート・マタが消えたぞ？」
アルケンティナ「ボム・テロの方も同じく消えてしまいました」
丹波の黒豆「何が起こってるんだ？」
一応正也たちと話せるってことは回線は繋がっているようだな。
？？？「ヴァルルルルルルルルルル！！」
摩天楼の奥から遠吠えの様な音が聞こえてくる。

アーサー王「モンスターの声か？」
京豆腐「でもあんな声聞いたことないよ？」
　二人とも気づいているみたいだな、今すぐ討伐に向かってもいいが・・・相手の戦闘力は未知数だしな・・・仕方ない、あいつを呼ぶか。
丹波の黒豆「とりあえず装備を整えるためにベースキャンプに戻るぞ」
アーサー王「おけ」
京豆腐「オッケー」
アルケンティナ「承知しました」
　そう言うと全員ベースキャンプへと戻っていく。
　俺はキャンプへと戻りながら、あるプレイヤーにメールを送った。

ピピピッ

メールが返ってきた様だ。
┣ナンデストー！？
　そんなのどこのサイトにも情報はなかったよ！？
　でも正体不明のモンスターなんて面白そうだね！！
　今すぐに飛んでいくよｂ
　コイツハオモシロクナッタキター！！┫
　いつもテンション高いなこいつ・・・
　とりあえず、あいつが来るまで回復系アイテムの補充を┣┫

≪ＳＵＮさんが入室しました≫

≪ふれあさんが入室しました≫

丹波の黒豆「はやっ！！」
　メールを読んだ直後にやってきたのはメールを送ってきた張本人

のＬＶ１９４（上限はＬＶ２００）の魔導道化師（トリック・スター）と見慣れないＬＶ１の祈祷師だ。
ＳＵＮ「やっほーい！！」
アーサー王「こんにちは、テンション高いな」
京豆腐「こんにちは～、この人がいつも言ってる人？」
丹波の黒豆「そうだ、そして俺の嫁だｂ」
　俺がＳＵＮのことを嫁と言ったのはこのゲーム内でＳＵＮと結婚しているからだ。最近はよく結婚ができるゲームがあるが、このゲームは普通のネトゲとは違い何人とも結婚できるため、作ろうと思えばハーレムを作ることが出来る、俺得すぎるゲームだ。
ＳＵＮ「夫がいつもお世話になっておりますｗｗｗ」
アーサー王「いえいえこちらこそｗｗ」
丹波の黒豆「おまいらｗｗｗｗ」
京豆腐「ｗｗｗｗ」
　おっと、今はふざけている場合じゃないな。
丹波の黒豆「とりあえず作戦を立てたいが・・・そこの子は誰だ？」
ＳＵＮ「ん？　この子は私のリア妹～♪」
丹波の黒豆「リアルで妹がいたのか」
ＳＵＮ「そだよー、ほら自己紹介してあげて」
ふれあ「うむ、わたしのなはふれあともうす、ぱそこんをはじめてつかうためへんかんとやらのしかたがわからいのですべてひらがなになってしまうが、よろしくたのむ」
　一応読点は打てるようだな、全部ひらがなってのは読みにくいが・・・ＰＣ初心者なら仕方がないか、だがなんで古風なしゃべり方なんだ？
ふれあ「これでいいのかあまてらすよ」
ＳＵＮ「こらっ！　ネトゲ内で本名を言っちゃメッだよ！」
　ＳＵＮの本名はあまてらすって言うのか・・・おい、待てよ・・・それじゃあこいつはまさか・・・
丹波の黒豆「つかぬ事を聞くけど、ふれあさんの本名は迦具土？」

ふれあ「おお、なぜおぬしがわれのなまえを？」
　すげー最近聞き覚えのある名前が出てきたのだが・・・確かめてみるか。
丹波の黒豆「また会ったな、迦具土」
ふれあ「おぬしといぜんどこかであったかのぅ？」
丹波の黒豆「もう忘れたのか？　この前に桜鳳神社で会っただろ？」
ふれあ「・・・・・！！」
　ようやく思い出したか、と言いたいところだがネットじゃ普通は分からないから言わないでおこう。
ふれあ「おぬしじゃったか」
丹波の黒豆「おう、ってか高天原でもネットは繋がってるんだな」
ふれあ「うむ、それにはわしもおどろいた」
　てか高天原ってどこにあるんだよ、まぁ少なくとも鳥取ではないだろうがな。
ＳＵＮ「一体何の話？」
ふれあ「まえにいったであろう、こやつがれいのおとこじゃ」
ＳＵＮ「私に似た男の人間がいるって話？」
ふれあ「そうじゃ」
ＳＵＮ「まさかその人間が黒豆だったとわねーｗｗ」
　本当にな、俺もＳＵＮが迦具土の言ってた天照だったとはびっくりだわ。
丹波の黒豆「その話は後だ、とにかく今は正体不明のモンスターの討伐作戦だ」
　俺はこのステージのＭＡＰをキャンプの机の上に開いて作戦を立てる。
丹波の黒豆「今回の敵は出現場所は多分ここ、そして声の大きさからかなりでかいと思われる、そうすると持久戦になる確率が高い、てっとり早く倒すには至近距離からの弱点を攻撃するのが良いが、未確認の敵なので場所が分からない。そこでコルリ・正也・京子の三人で足元を集中的に狙ってバランスを崩してくれ。天照はそいつ

の視線を他の奴に移さないようにかく乱、迦具土は回復を頼む。俺はそいつの弱点を探しだす。弱点を見つけ次第合図をするから、それが見えたら全員そいつから離れてくれ」
この作戦は基本中の基本の作戦で速攻型の作戦ではないが、どんな形のボスにも通用する万能な作戦である。
丹波の黒豆「俺たちが最初の討伐者になるぞ！！」
「「「「「「お～！！」」」」」」

このステージの中で最も高いビルへ上り、望遠鏡をのぞく。
丹波の黒豆「敵を発見した、方角は北西で距離は約5？、タイプは超大型の虫（バグ）、いや・・・合成獣（キマイラ）！？」
俺の望遠鏡から見えるボスの姿は胴体はデュラハン・右腕はドラゴン・左腕はゴーレム・背中は対空自動爆撃機（ディーラ・トゥルーパー）・下半身はマンティスの様な無理やり組み込まれたような姿をした奴がいた、ぶっちゃけ気持ち悪い。
アーサー王「キマイラ？　そんなボスいたか？」
京豆腐「いや居ないよ？」
丹波の黒豆「多分サーバーのバグから生まれたモンスターだと思うな、よく見ると一部欠損している部位がある」
破損している部位には不可思議な文字が羅列していた、遠すぎて見えないが多分構成式か何かだろう。
丹波の黒豆「あとは作戦通りに頼むぞ」
そう言うと俺は腕に装備したワイヤー・ガンを使い、ビルからビルへと飛び移りキマイラに最も近いビルへと移動する。
アルケンティナ「マルチロックオン、発射（バースト）！！」
皆よりも早く着いたコルリが両肩のミサイルポッドを一斉射撃する、おっ全弾命中。
アルケンティナ「！？」

だがよく見るとミサイルの当たったところから傷が治っていく、自動回復能力付きとか勝てる気しないな。
とりあえず落ち着け俺、最初にすべきはあいつの情報を整理する事だ、キマイラの全ての部位の制御と自動回復能力を持っているとなるとメインコア(制御結晶)があると思われる(今まで読んだ漫画やプレイしたゲームの経験上の推測)、そこが弱点だと思うが場所が分からなければ手が出せないな・・・っていうかスライ◯ウィッチーズみたいだな。
アーサー王「オラオラオラオラオラオラ!!」
京豆腐「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!」
正也は無数のモンスターを召喚して、京子は残像が出来るくらいキマイラの下半身に連続攻撃(ラッシュ)を繰り出している。
SUN「二人の背中にスタープ◯チナが見えるがするwww」
今の状況にジョ◯ョネタはぴったりだが、もう少し真面目にしてくれ。
そう思った時、キマイラの背中から何かがちらっと見えた気がした、まさかあれが・・・
丹波の黒豆「正也、そいつの動きを止めろ!!」
アーサー王「おうよ!!」
アーサー率いるゴーレム軍がキメラの足を押さえ、キマイラの動きを止める。
丹波の黒豆「俺の切り札を見せてやらぁ!!」
そう言うと俺は合図である信号弾を上空に撃ち、登録している武器の中で最も火力の高い武器を出す。
それの形状はまさに超電磁砲(レールガン)、特徴は肩に固定されたかなり長い砲身と俺が背中に背負っている小型強力発電機だ、攻撃面ではチャージに時間がかかるが撃てばまさに一撃必殺級のダメージを与えられる。
狙撃型の銃の中では一番強く、超レアな代物だ。
チャージは移動中に済ませておいたから後は撃つだけだが、これ

が結構難しい。
丹波の黒豆「重力誤差補正、風圧誤差補正、湿度・気圧誤差補正、すべて良好」
　てかここまでリアルにしなくてもいいだろ・・・少しの誤差でかなり着弾地点変わるんだぞこれ。
丹波の黒豆「狙い撃つぜ！！」
　若干古めのネタを叫びながら放った弾は狙ったところに当たる━━と思われたが右上に少しそれた。
　理由は分かっている、発射した瞬間に誰かが手榴弾を投げ入れたのが見えた、その手榴弾の爆発で微量な風が生まれ、レールガンの弾に影響したのだ。
　まぁその誰かっていうのも分かっているんだがな。
丹波の黒豆「くそっ外したっ！！　コルリ、お前から見て二時の方向のビルにミサイルを全弾叩き込め！！」
アルケンティナ「肯定します」
　そう言ってコルリが撃ったミサイルがすべてビルに当たると、ビルは轟音を立てて崩れていく。
　ビルが崩れていくのと同時に俺は今いたところから崩れていくビルの瓦礫のへと飛び、その上を飛び回ってキマイラの背中へと近づいていく。
メラーナ「ぐえっ！？」
　何か踏んだ気がするがそれは俺の邪魔をした張本人だろう、罰としてそいつの背中を使いおもっきり踏み台にしてキマイラの背中へと飛んだ。
メラーナ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
　落ちていく邪魔者の悲鳴が心地いい、て言うかざまぁみろ。
　無事にキマイラの背中へと飛び乗ると周りを見渡す、するとさっき撃ったレールガンの傷跡があった。　俺はそこに向かいながら装備をレールガンから大口径ガトリング砲へと変え、真下に向かって撃ち続ける。

ズドドドドドドドドドドドドド！！

気が付くと弾を撃ち尽くし、硝煙が俺の周りを包んでいた。
硝煙が晴れ、弾を撃ち込んだ傷穴の中を見るとメインコアが顔を出していた、チャ～ンス！！
丹波の黒豆「これで、ラストォ！！」
そう叫ぶと俺はそこに大型マインスローアを撃ちこみ、その場所から地面に向かって一気にダイヴする。
その数秒後にキマイラの背中から爆音がして、キマイラは灰になっていった。
丹波の黒豆「ミッションコプリーツッ！！」
ボロボロの服装を身にまといながら俺はそう言った、気分はメタルギア破壊直後のス○ークだ。
アーサー王「グッジョブ！」
京豆腐「ナイススナイプｂ」
アルケンティナ「流石です」
ＳＵＮ「流石は私の夫だねっ」
ふれあ「すごいたたかいかたじゃったのう」
丹波の黒豆「そう褒めるな」
照れるコマンドをしながら皆のところへ歩いて──あたっ。
俺はキマイラの灰にうずもれた何かが足に当たりこけかける。
丹波の黒豆「なんだこれ？」
そう言って灰から何かを取り出す、これは・・・キー○レード？
丹波の黒豆「出るゲーム間違ってるんじゃねぇの？」
アーサー王「だな」
でも何かを開ける鍵なのは確かだな、でも何をだ？　宝箱か？
扉か？
？？？「手を上げろ！！」

背後から急に声が聞こえたので一瞬びくっとしてしまったが、俺は手を上げずに普通に振り向く。
???「って、貴方は確かギルド≪太陽の園≫のギルドマスターよね？」
丹波の黒豆「え？　ああ、そうだが」
???「私は運営管理局ネット警備部隊のサラよ、よろしくね」
丹波の黒豆「よろしく、と言うかなんで俺のことを？」
サラ「貴方のギルドは管理局ではかなり有名よ？」
そんなに有名なのか・・・それは善い方に有名なのか、悪い方に有名なのか・・・出来れば善い方であって欲しい。
丹波の黒豆「それはともかく、こいつは一体なんなんだよ」
キマイラ・・・が原料の灰を指さす。
サラ「それが分からないのよ」
丹波の黒豆「分からない？」
バグだったらただ報告が無かったのかもしれないが、バグにしては精巧過ぎる気がする。
チーターが面白半分に作ったやつをゲーム内に入れたって可能性もあるな。
だが、それ以外の何かがある気がする・・・あくまでも勘だがな。
丹波の黒豆「こいつの戦闘力と攻撃法、あとSS（スクリーンショット）をお前に渡すから管理局の上層部に提出してくれ。その代りにこいつの情報が入り次第、俺にメールをくれ」
サラ「メールはどこに送ればいいの？」
丹波の黒豆「ギルドマスター専用のに送ってくれ」
このゲームのメールは簡単に三つに分けられる、一つは≪個人用メール≫これは基本的なメールで自分が登録しているフレンドとメールできる。
二つ目は≪ギルドメンバー専用メール≫名前の通りギルメンのみ使えるメールで集会などで使うことが多い。
三つ目は俺が言った≪ギルドマスター専用メール≫これも名前の

通りギルマスのみ使えるメールで運営からの緊急メールや各ギルメンへの一斉送信などギルメン専用よりも使える機能が増えている。
だがギルドマスターになるのはそう簡単なことじゃない、ちょっとした判断試験や戦闘試験があったりする、再度言うが何でこんなところだけリアルなんだよ。
丹波の黒豆「後は頼んだぜ」
サラ「分かったわ、じゃあね」
そう言うとサラはその場から消える、運営管理局員全のみが使えるという任意転送魔法（テレポート）を使ったのだろう、俺の推測では運営管理局全員が神出鬼没のマニュアルライセンスを持っているのだと思う・・・そんなわけないか。
とりあえずステージクリアにはなっているらしく広場へと戻るゲートが開いていた。
そこを俺たちは通り広場へと戻る。
アーサー王「あー疲れた、俺はもうそろそろ落ちるわ」
京豆腐「私もー」
ふれあ「わしもねむくなってきたのぅ」
丹波の黒豆「ならもうそろそろお開きにするか」
ＳＵＮ「そうだね、じゃあ私も落ちるよ」
丹波の黒豆「俺はもう少しレアアイテムでも探しに行くとするかね」
アルケンティナ「私もアイテム探しについて行きます」
ＳＵＮ「えー？　じゃあ私も黒豆について行くー♪」
と言うわけで、俺とコルリと天照の冒険は朝４時まで続いた。

あ、そう言えばサラにキーブ〇ード渡すの忘れてた。

つづく

架空の激戦（後書き）

ちょっとした話だったはずなのに本編並みに長くなってしまった・・・

あともしかしたらこの続きかくかもなのでこうご期待！！

「部活動か、そうじゃないのか」と問われると「限りなく遊びに近い部活じゃ

昨日の激戦の後にコルリと天照とレアアイテムを探しに行くのが終わったのは朝４時だった。そして起きたのは６時、いつもの事なので体が慣れてしまったようで特に眠気などはない。そしていつもの様に学校へ行き、授業を受け、そしていつものように色々と飛ばして放課後。

「終わったー、ってことで久々に部活に行くか」
俺は席から立ち上がり、カバンを持ちながらそう言う。
「おっけーだ」
「久々と行っても三日くらい行ってないだけだよね？」
「まぁ、そうだけどな」
もう部活に行くのが日課のようになってるから数日飛ばすだけで久しく思えてくる。
「部活ですか？」
「そだよ～」
「その部活は何をしているのですか？」
「とりあえず行けばわかる」
「そうだな」
と言うわけで部室へ移動するとする――
「お兄様ー！！」
「どぅふっ！？」
横から何かがタックルしてきた、まぁ・・・その何かはすでに分かっているがな。
「お・に・い・さ・ま～♪」
「お前は白井○子か！！」
白羽が抱き着いてくる、御坂○琴の気持ちが分かった貴重な瞬間

だった。
「どこに行くんですか？　私も連れて行ってください！！」
「どこに行くも何もただ部活に行くだけだ」
「部活ですか？」
「ああ、お前もついてくるか？」
「はい、行きます！！」
と言うわけで、部室へ移動するとするか。

「ここが俺たちの部室だ」
そう言って立ち止まったのは特に変哲のない普通の教室のドアの前。
「え、ここですか？」
特に部室名とか書いてないから白羽が疑うのは無理もない。
「まぁ入ればわかるって」
そう言うと俺は扉を開き、中へと入る。
「スラ〇ッパギー」
「こんちゃーっす」
「ちわーっ」
「あら、柳本君じゃない」
部室には三年でこの部活の部長でもある≪卜部（うらべ）　紗枝（さえ）≫先輩がいた。
かなりプロポーションがよく、大人っぽい人で頭が良い。
そのため芦沢先輩のようにファンクラブがある・・・と井藤に聞いたことがある。
性格の方は普段は大人のお姉さんみたいな感じだけども、鞭を持つとドSへと変貌したりする、それが原因で起こった≪下剋上事件≫はきっと後輩たちに語り継がれるであろう。
あと富豪派でお嬢様なのに、執事やメイドを付けずに何事も自分

でやろうとする。
それは良いことなんだが・・・かなりの非常識のため、予想の斜め上の間違いをしてくれる。

「どうも先輩、金曜日は部活に出れなくてすいませんでした」
「ほんとよ、そのせいで私のＰＣがツンのまま動かないのよ？」
「それはデータを詰めすぎた先輩が悪いのでは？」
「でも、修理が遅くなったのはあなたのせいよ」
「責任転嫁っすか・・・」
「あら、私はただ本当のことを話しただけよ？」
あー、はいそーっすかー。
そう思いながら先輩の机にあるＰＣの本体を中央にある机へと移動させると、カバンから工具を取り出す。
「あら、この子達は？」
あー、そう言えば二人を忘れてたな。
「えーと、二人のうちでっかい方が俺の従姉のコルリで、ちっこい方が明道先輩の従妹の白羽です」
「初めまして、コルリ・Ａ・ホミュラーと申します」
「お初にお目にかかります、桜鳳白羽と申します」
「私はこの部の部長の卜部紗枝よ、よろしくね」
「二人とも部活見学をしに来たんですよ」
「入部しにきたのね？」
なんでやねん、人の話をちゃんと聞けや。
「いや、部活見学ですって」
「でも結局は入部するんでしょ？」
そう決めつけるのはどうかと┃
「肯定します、私はこの部に入部する気です」
「私もです」
「なっ！？」
えぇっ！？　本気と書いてマジでっ！？

「はい決定、新入部員二名入りました～♪」
いや、そんなラーメン屋みたいなノリで言われてもな・・・
「てか先輩、これ以上部員増やしてどうするんですか？」
うちの部はこの学園じゃ珍しく、富豪派・庶民派・体育派が対立せずに共存している。
まぁ、そのせいで部員が約３０人もいる、だが半数以上が幽霊部員なので実質的には部活動として機能していない。
そして最近ついに学校長直々に「無駄な部費を削減のために幽霊部員を退部させろ」との命令が来ているという、いろいろと終わっている部活だ。
「大丈夫よ？　近々部員仕分けをするつもりだから」
「それならいいんですけどね」
うん、それなら安心だ・・・まぁ、どうせそれは俺がやる仕事なんだろうなぁ・・・
実はと言うと、俺はこの部の副部長だ。
本来は部長以外の三年生がやるべきなのだろうけど三年は卜部先輩以外全員幽霊部員だし、二年の幽霊じゃない部員は居るんだけども、全員俺より劣っているとか潜在能力は俺の方が他の奴よりもすごいとか言われて強制的に副部長にならされた。
副部長の仕事は基本部長の仕事をする。
補佐とかではなく部長がすべき仕事を全て俺がやる、というかやらされる。
だから実質俺が部長だったりする。

「とりあえず、ＰＣをバラすとするか。あ、コルリは手伝いを頼む」
「肯定します」
俺はパキパキと指を鳴らし、ＰＣ本体のケースを傷をつけないようにゆっくりと外していく。
「コルリ、ホコリ取りスプレーを取ってくれ」
「肯定します」

コルリからスプレーを受け取ると中に向けて短く噴射する。
そして工具入れからプラスドライバーを出して、手始めにファンを固定しているネジを外していく。
「大分ホコリがたまってるな・・・」
ネジを外してほこりまみれのファンを持ちながらそう言う。
外でほこりを吹き飛ばさなきゃならないな・・・
「正也、これのほこりを外で落としてきてくれないか？」
「まかせろ、それじゃスプレー借りるぞ」
「うい～」
そう言うと正也はホコリ取りスプレーを持って外へと出て行った。
さて、次は本命のマザーボードっと・・・うむ、俺の推測通りメモリの増設が可能だな。
「先輩、増設メモリは買って来ましたか？」
「これよね？」
そう言って渡されたのは紛れもない増設メモリ、にしてもこれ８ＧＢの高いやつだ・・・流石は富豪派だな。
「これを～ここに～さくっとな～♪」
メモリーをマザーボードのメモリ増設の空き部分するところに差し込む。
すると、ちょうど正也が戻ってきた。
「これでいいのか？」
ファンについていたホコリはすべて取り除かれていた。
「ナイスだ」
正也からファンを受け取り、バラした時の逆の手順で組み立てていく。
それが終わると先輩の机へと持っていき、電源のコンセントなどのコードをＰＣに挿していく。
「トドメにディスプレイをつないで、電源をオンしてっと・・・」
電源を入れると画面にはおなじみのｗｉ○ｄｏｗｓのマークが現れる。

「あら、ついたわね」
「あとは自分でいらないデータを消していってください」
先輩に頼まれていたメモリーの増設作業を終えた俺は自分の机の前に行き、椅子に座る。
なんか一般人はお置いてけぼりな作業だったな。
「・・・あ、そうだ」
そうつぶやくと自分の机の隅にある引き出しから入部届を取り、二人に渡す。
「とりあえず入部届に名前を書き込んでくれ」
「肯定します」
「わかりました」
二人は自分の筆箱からシャーペンを取り出し、書き込んでいく。
「これでよろしいのでしょうか？」
「これでいいの？」
二人から入部届を受け取る、ちゃんと記入できてるな。
「ようこそ、亜空間研究部へ」
この部伝統の歓迎である歓迎の言葉を二人へ送る。
「これでお前たちも俺たち亜空間研究部の部員だ」
「それじゃ、まずは席を決めないといけないわね」
「それなら丁度開いている席がいっぱいあるから勝手に選んでくれ」
「私はここにします」
「なら私はここにします」
コルリの選んだ席は俺の左隣の席。
白羽が選んだ席は俺の右隣の席。
はっ！？　二人にはさまれてる！？
これは非常にやばい。
どれくらいやばいかというと、買い物をした時に後ろにレジ待ちの列があるのにうまくおつりが財布に入らないときくらいやばい・・・あれ？　よく考えるとそこまでやばくないな。
「あの、この部は何をする部なのですか、お兄様？」

二人に挟まれている状況の危険度を考えていると白羽がそんなことを聞いてきた。
この部のしていること？
脳内で記憶をさかのぼる、そして出た結論は・・・・
「えーと・・・遊ぶ？」
それ以外何もしていない気がする、でも時々オカ研っぽいことをする時があるな。
「卜部先輩、ここって何をする部なんですか？」
「・・・遊ぶのかしら？」
なんか同じような答えが返ってきちゃったよ。
「要するにG〇部とかS〇S団的な感じの部なんですね」
「だいたい合ってるわね」
合ったら駄目でしょ。
「ってことは基本自由行動だな」
「それなら・・・」
白羽はそう言うと俺の腕にくっついてくる、コアラかお前は。
「とりあえず離れてくれないか？」
「何でですか？」
「プラモが作れないから」
キリッという擬音が聞こえそうなくらい真剣な顔で白羽に告げる。
お前がそこに居るとヤスリがけがやりにくいんだけど。
「そんな物いいですから私とキャッキャウフフしま――いはいいはいいはい！！　ほっへをのばはないれくらはいよ！！　ほれいじょうはりゃめえええええええ！！　ひぎれる！！　ほっへひぎれるぅ！！」
お前がプラモのことをそんな物呼ばわりするから悪いんだ。
にしてもこいつのほっぺかなり伸びるな、まるでゴムのようだ。
「酷いです・・・でもそんなお兄様も素敵です！！」
なんかあの一件以来、白羽が〇子化してきてないか？
そんなことを考えていると部室のドアが開いて誰かが入ってきた。

「失礼しますわよ？」
「失礼いたします」
なんと、芦沢先輩とそのメイドさんだった。
「あら、ハズレ？」
「私はハズレなのですかっ！？」
「あら、違うのかしら？」
よく平然と本人の前でそんなことが言えるんだろう、ある意味尊敬できるな。
「違いますわよ！！　ってあら・・・これは？」
先輩の目線の先にはショーケースが。
そのショーケースの中には俺と卜部先輩が作ったプラモが飾られている。
「卜部さんは富豪派ですのにこんな庶民のくだらない玩具で遊んでいますの？　流石は庶民貴族と言うところですわね」

ピキッ

こいつは今言ってはならないことを言ってしまった。
その言葉は普段は怒らない俺でも激怒する力を持っているＮＧワードだというのに。
「・・・卜部先輩？」
「ええ、分かっているわよ？」
卜部先輩の方を見ると黒い負のオーラをまとっていた。
こういう所に限って分かりやすい人だ。
「今回はこれの使用を解禁します」
そう言って机から取り出したのは、黒光りする・・・鞭。
「あら、本当にあの子を呼んで良いの？」
「それを聞く意味はないと思いますが？」
「うふふっ、なら遠慮なく・・・」
先輩は俺から鞭を取ると黒い負のオーラがドス黒い負のオーラへ

と黒さを増した。
「ふふっ・・・久しぶりね、ざっと二週間ぶりかしら？」
これは卜部先輩の第二人格、そう卜部先輩は多重人格者だったりする。
しかし、鞭を持つと人格が変わるという条件付きの特別な多重人格者なので、鞭を持たさなければ第二の人格が出ることはない。
だが本人が「その子なら心の中でいつも私と話しているわよ？」と言っていることから第一人格であるいつもの先輩は第二人格のことを知っているようだ。
そのことから卜部先輩は通常の多重人格者とは少し違うようだ、例えるなら遊○と名もなき○ァラオ的な感じ。
そう俺が脳内レポートを書き込んでいると、ドS化した先輩はどこから縄を取出して芦沢先輩の手足を縛っていく。
本当にどこから出したんだそれ・・・・
「卜部さん！？　何で縛ってるの！？」
「私のことは卜部様とお呼びなさい、このメス豚が」
「え？　え？」
卜部先輩は芦沢先輩の手足を縛ると、そのまま引きずって廊下へと出ようとする。
多分あの部屋へと向かう気なんだろうな・・・
あの部屋って言うのは分かりやすう言うと・・・・・・・・・拷問部屋だ。
これ以上説明をすると規制がかかってしまうので・・・勘弁してください。
「ちょっと、原野！！　助けなさい！！」
「すいませんお嬢様、私では卜部様には勝てませんのでそのまま連れて行かれちゃってください」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁらぁぁぁぁぁのぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
原野と呼ばれたメイドさんはハンカチを旗のように振って地獄もとい拷問部屋へと向かう主人を見送っていた。

だがそれはメイドさんとしてどうなんだろう。
「そう言うことですので、少しながらお嬢様をここで待ってもよろしいですか？」
「あ、はい。少し汚いところですけどゆっくりしてください」
「ありがとうございます」
それにしても・・・この人どっかで見た気がするんだが。
「何か用ですか、柳本さん？」
俺の視線に気づいてそう訪ねてきた・・・あれ？
「何で原野さんが俺の名前を知っているんですか？」
以前芦沢先輩の家へ行ったときには見かけなかった気がする。
「それはお嬢様が・・・いえ、私はこの学校の生徒なので」
「え？　そうなんですか？」
「そうなんです」
うーむ、どっかで見たような・・・あ。
「あー」
「どうなされましたか？」
「原野さんの居るクラスって庶民派の二年三組ですか？」
「なんでそれを知っているのですか？」
「それはですね、図書室へ行くのに三組の教室の前を通るじゃないですか、その時ついつい教室内を見てしまうんですよね。んで、その時に原野さんを見た気がします」
俺と正也はよく図書室を利用するため、三組の前をよく通る。
「でもよく私が三組だと分かりましたね」
「なんでそんなことを？」
「私は今はメイド服を着ているんであれですけど、私服や制服になるとすごく影が薄くなってしまうんですよ・・・」
メイド服には影を濃くする効果があるとは・・・早くあか〇ちゃんに知らせなければ！！
「それじゃあ今度制服の原野さんを見に行きに三組へ行きますね」
「ふふっ、お待ちしています」

若干フラグが立った気がするがそこはスルーしておこう。
そう思っていると部室の扉が開いた、卜部先輩が帰ってきたのか？
「ちわっす」
「なんだ、亜賀か」
「何だとはなんだよ」
こいつは≪亜賀（あが）　真咲（まさき）≫、庶民派の一年二組に在席している。
漢字的に女子っぽいが一応男子だ。
顔立ちは女子っぽいけど一応男子だ。
若干声が普通の男子よりも高いが一応男子だ・・・と思う。
あれ？　なんか怪しくなってきたな・・・
最近男装した女子が男子として学校に登校している漫画もあるし・・・いや、そんなのリアルであるわけないか。
他の情報は特にない、と言うか他のクラスなので情報があまり入ってこない。

「卜部先輩かと思ってさ」
「そう言えばいないな、どこへ行ったんだ？」
「・・・聞くな」
「・・・あれか」
俺の一言で察してくれたみたいだ、流石はあの事件唯一の目撃者だな。
「そう言えばさ、そこの廊下で聞いたんだけど」
また始まったか・・・亜賀が「そこの廊下で～」のフレーズで始める場合はオカルト物の話だと決まっている。
もうオカ研に入っちまいなよｙｏｕ。
「三ノ宮の市街地で夜に何かの集団が集まってるらしい」
「何かの集団・・・？」
「何やら黒いマントを羽織った集団らしい」
「黒いマント・・・」
うん、思い当たる画像が頭ん中から出てきた。

あいつらと戦うとなると・・・必要なのは十字架と鞭か？
「すまん、今日はもう帰るわ」
「お、おう」
「行くぞコルリ」
「肯定します」
すぐに工具をカバンの中に入れ、ダッシュで家へと帰る。
「あら、もう帰っちゃうのかしら？」
部室を出てすぐの廊下で、あの部屋から帰ってきた卜部先輩とすれ違う。
・・・魂の抜けかけた芦沢先輩を引きずって部室へ戻って来たのかよ。
「すいません、急用ができたので帰らせてもらいますっとぉぉぉぉぉ！？」
そう言うと俺は全力ダッシュする・・・が、ある重要なことを忘れていたのを思い出した俺は全力ダッシュの勢いを足首のスナップを利かして殺して器用にUターンする。
「どうなされましたか、マスター？」
「ちょっとした忘れ物だ！！」
そう言うと卜部先輩のもとへと走り、鞭を奪い取る。
「あら、もう終わりなの？　もう一人の私が愚痴を言ってるわよ？」
ドSモードの人格の状態の先輩を止められるのは確認されている限り俺しかいない。
その状態で部室へ行かれると部室が口では言えない様なグロいことになってしまうので俺がいるうちにもとの先輩に戻さないといけない、と言うかそういう義務が俺に発生しちゃってる。
「それじゃあまた明日っ！！」
そう言って逃げるように走っていく。
早く帰らせてくれよほんとに・・・・

つづく

マジで殺られる五秒前

亜賀から気になる情報を聞いた日・・・いや、ぶっちゃけ前回の部活をした日の夜。

三ノ宮の市街地に謎の黒いマントを着た集団が集まっているとの情報を亜賀から聞き、現在三ノ宮の市街地にて潜伏中。今回、俺はパーカーではなく錬金術で作った鉄製の仮面（ファン〇シースターのキャ〇ト風）を被っている。鉄製のため、若干重い。

「見つからないな」

「肯定します」

かれこれ約一時間は探し回っているのに黒いマントの「く」の字も見えない。完全に行き詰まりだ。

「あ、そうだ。あれをやるか」

「あれ・・・ですか？」

「ああ、あれだ」

「マスター、あれとは何でしょうか？」

まぁ、普通わかるわけないよな。

「地形把握魔法（レイアース）だ」

この魔法は地の精霊と契約を交わし、一定の範囲の地形や生物反応等の情報を得ることが出来る。だが空にいる鳥などは探知できないらしい、どうやら地面に接地している物しか探知できないようだ。

「我、大地を歩む者、大地に宿る精霊と今契約を結び世界の形を知らん」

そう唱えると三宮の市街地の情報が頭の中に流れ込んでくる。通常の人なら情報過多で処理しきれなくなってるかもしれないな、俺は平気だけど。

「ここから北西約１００ｍに人間の生物反応が集まっている、行く

ぞ」
「肯定します」
俺たちは気配を消し、目的地へと急いで向かった。

「ビンゴみたいだな」
「肯定します」
目的地は空き地になっていて、そこに黒いマントの集団が集まっていた。
さて、平和的解決に向けての第一歩とやらをするか。
「こんばんは、吸血鬼(ヴァンパイア)さん達」
「こんばんはであります」
「「「「!?」」」」
あー、驚いてる驚いてる。
まぁ、自分たちの会合に敵が堂々と来るなんて思いもよらなかっただろうな。
「・・・変態?」
「変態ちゃうわっ!!　この仮面はお前らに顔を見られたくないだけだ!!」
まさかこの仮面をつけているだけで変態扱いされるとは思わなかった、せめてコスプレイヤーと間違えろよ!!
「で、錬金術師が私たちに何か用ですの?」
前に聞いたことがある声が耳に聞こえてくる。
「また会ったな、金髪ロールのヴァンパイアさん」
「相変わらず予想外のことをしてくれますわね」
「そっちにいるのは四字熟語のヴァンパイアさんだね?」
「・・・一発必中」
どうやら当たりのようだな。と言うかなんかそれ若干無理やりじゃないか?

「今日俺がここに来たのは戦うためじゃない」
「へぇ、それでは何の用ですの？」
「お前たちの目的が聞きたいだけだ」
「目的ですの？」
「そうだ、前回のエクソシストの件も気になるが・・・まずは何故お前たちヴァンパイアがイギリスじゃなくて日本にいるんだ？」
「痛いところを突いてきますわね」
いきなり地雷を踏んだっぽいな。と言うか俺よく地雷を踏むよな・・・体質か？
「貴方になら話しても良いでしょう・・・それはですね―」
金髪ロールのヴァンパイアがそう言いかけた時、
「ヴァンパイア共、そこを動くな！！」
そんな空気の読めない台詞が聞こえてきた。
その声の主の方を向くと白人の若い男が立っている、そいつが着ているのは・・・修道服。
「エクソシストか・・・コルリ、ヴァンパイアたちを守れ」
「肯定します、マスター」
そう言った時、一瞬にして周りが殺気で満たされる。周囲を見渡すと至る所にエクソシストたちが居た、どうやら俺たちは囲まれているらしい。
この状況を打破するにはどうすればいいだろうか・・・張り倒すのが一番簡単な方法だが、それではむしろ奴らを怒らしてしまう。それ以外では・・・俺が犠牲になるのが一番手っ取り早いな。
「待て、こいつらに罪はない」
そう言って俺は空気の読めない修道士（ブラザー）の前に立つ。
「動くなと言っただろ！！」
「生憎ながら俺は人間だ」
「貴様もどうせそいつらに魂を売ったのだろう！！」
「意味の分からないことを言うな、俺はこいつらに魂を売った覚えは無い」

「黙れ！！　この聖水で逝ってしまえ！！」
男から聖水と呼ばれる水をかけられるが特に変化はない、当たり前だがな。
「で？　他に言いたいことは？」
「そんな・・・聖水が効かない・・・！？」
ヴァンパイアに魂を売ったと勘違いされたあげく、服をビショビショにされた俺の頭の中にはもう「叩きのめす」の文字しか無い。今まで隠していた殺気を周囲に飛ばす。俺の殺気は周りのエクソシスト共の約数十倍は濃い殺気だ。
「・・・・今に神の裁きを受けるがいい、この下衆め！！」
「そうか、言いたいことはそれだけか」
そう言うとそいつの頭を鷲掴みにし、
「・・・・アーメン」
ドゴォォォォォォォォォォン！！
地面に思いっきりぶつける。一応手加減はしてあるので死んではいない・・・と思う。
「お前ら、俺をあんまり怒らすんじゃねぇぞ？」
そう言いながら両腕に付けている腕輪を長い鞭に錬金する。
「錬金術師！？」
「気づくのが遅かったな」
そう言った瞬間手に持っている鞭を豪快に横に振り回す、鞭は見事に周りにいたエクソシストたちの顎に当たる、すると全員が脳震盪（のうしんとう）を起こしてその場に倒れていった。
奴らが全員倒れるのを確認すると鞭を腕輪へと錬金し直し、殺気をすべて消す。
「で、さっきの続きなんだが━」
そう振り返った瞬間━
ブシュッ

肉を切る音がし、俺の腹部から血が流れる。
「・・・マスター！？」
コルリの驚く声が聞こえる。
俺にも何が起こったのか分からない、下を見るとサバイバルナイフが俺に刺さっていた。
「お、お前は奴らのな、仲間なんだろ？」
こいつは他のヴァンパイア達の陰に隠れていたやつ・・・
「がはっ・・・」
ナイフを抜き、刺されたところを手で押さえる。だが刺さったところが悪かったらしく力が入らない。
俺はそのままバランスを崩し、その場に倒れこむ。
「大丈夫ですの！？」
金髪ロールのヴァンパイアは倒れた俺を抱き寄せる。
「何をしているんですか、こいつは間違い無く敵ですよ！？　」
俺を刺したヴァンパイアが何かを言っているが俺にはもう何を言っているのか分からない。
ナイフの刃に毒でも仕込んでたのか・・・俺としたことが抜かった。
「しっかりしなさい！！」
駄目だ・・・意識が・・・薄れていく・・・・
「貴方――に何を――るの！！」
ぼんやりと風景をとらえる俺の目に修道服をまとった少女が見えた、どうやら他のエクソシストが来たらしいが俺はもう――

そして意識は途切れた。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2706s/

錬金術師は今日も行く

2011年10月10日03時27分発行